

平成31（令和元）年度

研究活動報告



桜美林大学 老年学総合研究所

はじめに

皆様におかれましては時下益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。

老年学総合研究所は、超高齢社会を迎えた我が国において、より明確に「老年学」という、高齢者を取り巻く広範な課題に適切に対処できる研究機関であることを知っていただくとともに、広く社会一般の方々に「老年学」の重要性とさまざまな課題について、総合的な情報発信の中核的機関として、知っていただくことを目標に掲げております。現在、研究所の陣容としては研究員6名（本学の老年学研究科教授をかねております）、客員研究員2名、そして連携研究員37名を擁するわが国を代表する老年学の総合的研究所といえる研究所となっております。本年も研究所所属の研究員を中心として活動報告を取りまとめ、ここに令和元年度報告書として皆様にお届けすることができました。

老年学総合研究所は学際的で多様な視点からの老年学研究を総合的かつ強力に推進することはもちろんのこと、国内外の研究機関と連携し、科学的根拠に基づく情報発信を実施し、我が国の健康長寿の実現に向けた取り組みとして実践していく研究拠点でもあります。本報告書におきましても、老年学という広範な領域を包含する学際的研究にふさわしく、各研究員の様々な研究課題とそれらの実践活動を中心として実社会にお役に立つ実証研究が数多く報告されております。

本報告書の作成と出版にあたっては、老年学総合研究所の運営及び研究機関としての活動に多大なご協力をいただいた多くの先生方、また客員・連携研究員の方々、そして研究所の事務局の皆様のご努力のたまものであり、ここに厚くお礼を申し上げます。今後も桜美林大学 老年学総合研究所に対する温かいご理解とご支援、そして厳しいご指導を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

2020年3月

桜美林大学 老年学総合研究所

所長 鈴木隆雄

平成31（令和元）年度 研究活動報告

研究員（常勤）研究活動報告

1)	鈴木 隆雄	1
2)	長田 久雄	5
3)	杉澤 秀博	7
4)	新野 直明	11
5)	芳賀 博	13
6)	渡辺修一郎	16

客員研究員研究活動報告

1)	井上 智代	22
2)	鄭 丞媛	24

連携研究員研究活動報告

1)	青木 典子	27
2)	青木 宏昌	28
3)	青木 宏心	29
4)	有田 昌代	32
5)	池田 晋平	34
6)	植田 拓也	36
7)	植田 大雅	40
8)	葛 輝子	41
9)	久喜美知子	42

10)	久米喜代美	44
11)	小林由美子	45
12)	島影真奈美	47
13)	鈴木 知明	50
14)	関野 明子	51
15)	孫 潔	53
16)	武田 万樹	54
17)	東方 和子	56
18)	徳田 直子	57
19)	友永 美帆	58
20)	中辻 萬治	59
21)	永峰 大輝	61
22)	萩原真由美	62
23)	橋本由美子	64
24)	早崎 広司	65
25)	平林 規好	66
26)	藤井 顕	67
27)	堀内 裕子	68
28)	堀口 久枝	71
29)	牧野公美子	72
30)	三澤 久恵	74
31)	御園 一成	76
32)	山岡 郁子	77
33)	吉江 妙実	78
34)	吉田 綾子	80

1. 研究課題

後期高齢者の特性に着目した保健事業に活用すべき質問票の開発

2. はじめに

日本人の平均寿命は着実に伸び、令和1年では男性81.25歳、女性87.32歳となり、今後超高齢社会は急速に進展することになる。超高齢社会にはいくつかの注目すべき特徴があるが、中でも①今後75歳以上の後期高齢者人口が相対的に増えること、②さらに、後期高齢者の急増に伴って単身の高齢者世帯あるいは夫婦のみの世帯が増加すること、そして、③今後の後期高齢者の増加に伴って、フレイルと呼ばれる状態像、および要介護高齢者の増加が見込まれることである。

今後、後期高齢者が急増する中で、後期高齢者の健康を守り自立を促進するためには、（前期高齢者とは異なる）特にフレイル、認知機能低下（認知症予防）、および筋肉や骨という運動器機能低下（ロコモやサルコ）、さらには口腔機能低下と低栄養といった面での予防対策や健康維持が大きな問題であると考えられる。

後期高齢者の健康問題を考える際には「疾病予防」と「介護予防」の2つの戦略を考慮しなければならないが、疾病予防は理論上前期高齢者までは重要であるが、介護予防は70歳頃から特に重要となる。少なくとも75歳以上となる後期高齢者においては、疾病の予防より、むしろ生活機能の維持向上に重点をおいた介護予防的な対策が重要であることが明らかにされている。

3. 研究結果

後期高齢者に特徴的に表れる病態像について

後期高齢者では加齢に伴う心身の機能の減衰を背景として、様々な病態・症候が出現する。それらはフレイルを代表として早期発見、早期対応が、生活機能の維持、発症の先送り、そしてQOLの維持向上などの視点から、重要なポイントになる。①フレイルは健康障害につながる心身の脆弱な状態であると同時に、ストレスに対する予備力の低下に起因した状態である。その構成要素には身体組成、身体機能、身体活動、疲労、精神心理状態、さらには社会的問題などが含まれる。②認知症の予防対策において最も重要な時期は、認知症ではないが軽度な認知機能の低下を有する状態、すなわち軽度認知障害（mild cognitive impairment: MCI）の時期である。MCIの有症率は概ね10-15%。我が国においても運動+脳賦活化を中心とした運動介入によってMCI高齢者の認知機能低下の抑制が可能であ

ることがランダム化試験によって示されている。③ロコモティブシンドロームおよびサルコペニアはいずれも運動器の加齢に伴う障害を示している。ロコモティブシンドロームは加齢に伴う骨や関節などの運動器障害により自立度が低下し、要支援あるいは要介護になる危険のある状態。いずれの病態も必然的に筋力の低下を伴う他、日常生活を維持すべき身体機能の制限や障害の発生とも関連し、介護保険サービスを必要とする場合も少なくなく、高齢期の「生活の質（QOL）」に負の影響を与えることとなる。④低栄養・口腔機能（オーラル・フレイル）も高齢期の重要な健康問題である。適切な栄養の摂取、すなわち「食べる機能」を維持するためには良好な口腔機能、すなわち咀嚼機能及び嚥下機能の維持があげられる。高齢期の誤嚥性肺炎を予防するためには、口腔清潔管理はもちろんのこと、咀嚼機能と嚥下機能を一つのセットとしてサービスなどの提供を考える必要がある。さらに高齢期に不足しやすいたんぱく質やビタミンDの積極的な摂取の推奨が必要である。

後期高齢者の保健事業のあり方—特に簡便な質問票を用いた効果的スクリーニングについて—

今後の後期高齢者の保健事業の実施に際して特に配慮されなければならないのが、疾病管理と自立支援のための包括的アセスメントの実施と生活習慣病重度化予防も含め身心機能低下予防に着目した適切かつ効果的な介入（保健指導等）方策を検討することにある。国は平成18年の介護保険法改正によって、介護予防が施策の重要な柱となり、そのために地域支援事業が新たに設定され、要支援・要介護状態となる前からの介護予防を推進されることとなった。地域支援事業には「介護予防事業」が創設され、ハイリスクアプローチの観点から、「基本チェックリスト」を用いて要支援・要介護状態になるおそれの高い者（高齢者人口の概ね5%程度）を特定高齢者とし、全国一斉に介護予防事業を実施してきたが、平成27年度からは「通いの場」を中心としたポピュレーションアプローチに転換してきた経緯がある。しかし上記のような健康特性を有する後期高齢者では、単なる「通いの場」での対応だけでなく、特性に応じたハイリスクアプローチの有効的な組み合わせも必要と考えられる。その意味で、「基本チェックリスト」は上記のような後期高齢者の健康特性や機能低下のスクリーニングに極めて良く対応していると判断される。特に、フレイルに関してその三要素すなわち、身体的、精神心理的、そして社会的ドメインのスクリーニング項目を全て含み、その信頼性、妥当性等についても確立し、科学的根拠としての有効性が示されている（遠又靖丈ら；日本公衆衛生誌，2011；58：3-13）。

今回の調査事業において作成された、高齢者特に後期高齢者を対象とした、保健事業に利用されるべき質問票においては、上述の後期高齢者の健康特性に配慮し、またこれまでの全国的に使用され、膨大なデータの活用が可能である「基本チェックリスト」の優れた点も生かした後継的な質問票となっている。

質問票の役割として、

- 1) 中年期から前期高齢者のいわゆるメタボ健診に用いられている特定健康診査の「標準的な質問票」に代わるものとして、後期高齢者に対する健康診査（以下：健診）の場で質問票を用いた問診（情報収集）を実施し、高齢者の特性を踏まえた健康状態を総合的に把握する。
- 2) 診療や通いの場等においても質問票を用いて健康状態を評価することにより、住民や保健事

業・介護予防担当者等が高齢者のフレイルに対する関心を高め、生活改善を促すことが期待される。

3) 質問票の回答内容と KDB システムから抽出した健診・医療・介護情報を併用し、高齢者を必要な保健事業や医療機関受診につなげ、地域で高齢者の健康を支える。

4) 保健指導における健康状態のアセスメントとして活用するとともに、行動変容の評価指標として用いる。

5) KDB システムにデータを収載・分析することにより、事業評価を実施可能とし、PDCA サイクルによる保健事業に資する。

また、質問票の構成については、1) フレイルなど高齢者の特性を踏まえて健康状態を総合的に把握するという目的から、(1) 健康状態、(2) 心の健康状態、(3) 食習慣、(4) 口腔機能、(5) 体重変化、(6) 運動・転倒、(7) 認知機能、(8) 喫煙、(9) 社会参加、(10) ソーシャルサポートの 10 類型に整理され、これまでのエビデンスや保健事業の実際、回答高齢者の負担を考慮し、15 項目の質問で構成した。さらに各質問の意義あるいは根拠として、現時点における科学的根拠を明記し、エビデンスに基づく質問票となっている。質問票の最も多い活用場面としては、健診の事後指導を想定しているが、そこでは対象者の健康状態を把握し、高齢者が前向きに自身の健康のためにできそうなことを見つけることや、自治体や医療機関等が高齢者の健康課題を把握し自治体の保健事業や医療機関につなげることが可能なように配慮されている。

後期高齢者は 97.9%が医療機関を受診している（平成 29 年度医療給付実態調査報告）。今回新たに開発された質問票の利用にあたっては、高齢者の特徴である慢性疾患については疾病等の変られないことを受け入れる一方で、いくつもの優れた機能が十分に残っていることの自覚を促し、その中でも「自分でやれること、大切にしたいこと」に目を向けるように、総合的な視点からアドバイスするようこころがけるが大切であると思われる。

参考資料「後期高齢者の質問票の解説と留意事項」

(<https://www.mhlw.go.jp/content/12401000/000557576.pdf>)

3. 研究業績

(1) 学会発表（主要なもの）

- 1) 鈴木隆雄、他：カビ発酵乳製品が血中脳由来神経栄養因子（BDNF）に及ぼす影響 ランダム化研究、第61回日本老年医学会学術集会 東京、2019.6
- 2) 鈴木隆雄、他：わが国高齢者の身体機能、サルコペニア、フレイルに関する経年的変動に着いて 長寿コホートの総合的研究（ILSA-J）より、第61回日本老年医学会学術集会 東京、2019.6
- 3) 鈴木隆雄、フレイル予防のため食事・栄養 たんぱく質とビタミンD、第30回日本医学会総会名古屋、2019.4

(2) 国際講演 (主要なもの)

- 1) “The Changing Prevalence of Frailty and Sarcopenia among the Community Dwelling Elderly- Five Years Observation from ILSA-J” Gerontology Faculty, Jan. 19, 2019, Nagoya
- 2) “New Strategy for Health Promotion in Super-aged Society based on the Scientific Evidences” US-Japan Global Health Dialog. Sep 28-30, 2019, Washington DC
- 3) “Challenges Faced in Dementia and Community-Based Approaches in Prevention” G20 Health Ministers’ Meeting (G20保健大臣会合) Oct. 17, 2019, Tokyo.
- 4) “Community-Based prevention of frailty and dementia among the elderly in Japan” JICA, Special Lecture. Nov. 13, 2019 Tokyo.

(3) 論文 (主要なもの)

- 1) Suzuki T, Kojima N, Kim H et al. The Effects of Mold-Fermented Cheese on Brain-Derived Neurotrophic Factor in Community-Dwelling Older Japanese Women With Mild Cognitive Impairment: A Randomized, Controlled, Crossover Trial. J Am Med Dir Assoc. 20: 1509-1514. 2019.
- 2) Kim H, Won CW, Suzuki T. et al. The effects of exercise and milk-fat globule membrane (MFGM) on walking parameters in community-dwelling elderly Japanese women with declines in walking ability: A randomized placebo controlled trial. Arch Gerontol Geriatr. 83: 106-113.2019
- 3) Osuka Y, Kojima N, Suzuki T. Exercise type and activities of daily living disability in older women: An 8-year population-based cohort study. Scand J Med Sci Sports. 29: 400-406.2019
- 4) Suzuki T. Health status of older adults living in the community in Japan: Recent changes and significance in the super-aged society. Geriatr Gerontol Int. 18: 667-677.2018
- 5) Suzuki T, Jeong,SW, Arai Y,et al. Comparative Study on change in degree of independent living between continuation and discontinuation of home medical care among the elderly in Japan. J Geriatr Med Gerontol. 4:037DOI: 10.23937/2469-5858/1510037, 2018

1. 研究課題

高齢者の心理的適応に関する研究

2. 研究活動の概要

心理機能の加齢変化に関して、加齢性難聴への対応の研究は継続している。認知症の人と家族に対する統合的支援、高齢者の排泄支援の研究も、在学者・修了者と共同で行っている。

3. 研究業績

【著書】

- 1) 一般社団法人日本応用老年学会検定委員会編著（編集委員・検定委員として参加）、高齢社会の基礎知識 すぐわかる！ジェロントロジー：ジェロントロジー検定試験新公式テキスト、社会保険出版社、2019.6.1.

【論文】

- 1) Takechi. H, Yabuki.T, Takahashi. M, Osada.H , Kato.S. : Dementia Cafés as a Community Resource for Persons With Early-Stage Cognitive Disorders: A Nationwide Survey in Japan, <https://doi.org/10.1016/j.jamda.2019.04.017>, JAMDA (2019)
- 2) 長田久雄・関野明子・森下久美、認知症の非薬物療法のエビデンス 特集：認知症の非薬物療法のエビデンスと効果的な実践のあり方. 日本認知症ケア学会誌、第18巻第2号、425-430. 2019.7.
- 3) 鈴木みずえ・吉村浩美・長田久雄・金森雅夫、認知機能障害高齢者に対する看護実践上の自信の測定～急性期病院の看護における自己効力感尺度の開発～ 日本早期認知症学会誌、第12巻第1号、52-59 2019.7.15
- 4) ブラナン野口純代・渡辺修一郎・橋本由美子・長田久雄、ユニット型特養の施設環境と認知症利用者の生活の質との関連、応用老年学、13-1、17-26、2019.8.31.
- 5) 萩原真由美・柴田博・芳賀博・藤井圭・長田久雄、自発的な「死」の語り合いがもつ意味－デスカフェ参加者の人生観と死生観を通して－ 応用老年学、13-1、54-65、2019.8.31.

【学会発表】

- 1) 森下久美・矢吹知之・長田久雄・関野明子、認知症診断後に介護保険申請につながらなかった要因の検討－全国の家族介護者への調査から－、2019.5.25、第20回日本認知症ケア学会大会（2019.5.25-26）、京都・国立京都国際会館
- 2) 関野明子・矢吹知之・長田久雄・森下久美、「認知症かもしれない」と家族が違和感を覚えた事象の特徴－認知症高齢者を介護する家族介護者への調査から－、2019.5.25、第20回日本認知症ケア学会大会（2019.5.25-26）、京都・国立京都国際会館
- 3) 小林由美子・杉澤秀博・長田久雄・刈谷亮太・殿原慶三・石原房子、高齢期の健康関連の逆境に対するレジリエンスの分析枠組みに関する質的検討、2019.6.8、日本老年社会学会第61回大会（2019.6.7-8）、仙台・東北福祉大学仙台東口キャンパス
- 4) 関野明子・矢吹知之・長田久雄・森下久美、認知症高齢者の家族介護者が行う「演技」とは－演技に関する自由記述データから－、2019.6.7、日本老年社会学会第61回大会（2019.6.7-8）、仙台・東北福祉大学仙台東口キャンパス
- 5) 小林由美子・杉澤秀博・長田久雄・刈谷亮太・殿原慶三・石原房子、高齢期の健康関連の逆境に対するレジリエンスの関連要因およびアウトカムへの影響、2019.10.19、第14回日本応用老年学会大会（2019.10.19-20）、京都ノートルダム女子大学
- 6) 上野佳代・長田久雄・澤岡詩野・菊池和美・中村桃美、地域におけるインフォーマルな居場所；まちの暮らしの保健室における保健医療福祉の専門職の存在意義、2019.10.20、第14回日本応用老年学会大会（2019.10.19-20）、京都ノートルダム女子大学
- 7) 萩原真由美・藤井圭・長田久雄、中高年者のデスクカフェへの参加動機、2019.10.20、第14回日本応用老年学会大会（2019.10.19-20）、京都ノートルダム女子大学

【科研費などの助成金】

- 1) 研究代表者 佐藤美由紀先生 研究種目 基盤研究（C）課題番号 18K10623
研究科題名：当事者参加型アクションリサーチによる認知症の人と家族介護者にやさしい共生社会創造

1. 研究課題

- (1) 高齢者における健康格差とその要因に関する研究
- (2) 透析患者・家族に対する社会的支援に関する研究
- (3) 高齢者の起業・就業推進に関連する要因

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者の健康格差とその要因に関する研究

高齢期の健康がライフコース上の社会経済階層（SES）によって影響されることについては、経路モデル（父親の社会階層⇒本人の学歴⇒本人の収入⇒健康など）などを用いて分析されてきた。しかし、これらのモデルの妥当性が時期によって異なるか否かは不明である。本研究では、いくつかの経路（①父親の就学年数⇒健康、②父親の就学年数⇒本人の就学年数⇒健康、③父親の就学年数⇒本人の世帯収入⇒健康、④父親の就学年数⇒本人の就学年数⇒本人の世帯収入⇒健康）を用いて、ライフコース上のSESの高齢期の健康に対する影響が時期によって異なるか否かを分析した。分析データは日本版総合的社会調査のデータ（2000年～2012年）であった。健康指標には健康度自己評価を用いた。分析の結果、2005年以前のデータでは、④父親の就学年数⇒本人の就学年数⇒世帯収入⇒健康のパスが有意に影響していたが、このパスは2005年以降のデータでは有意でなかった。③父親の就学年数⇒本人の就学年数⇒健康については、2008年以降のデータでのみ有意な影響が観察された。以上、父親の社会階層が高齢期の健康に影響する経路は、時代によって異なることが示唆された。

この研究は、科学研究費助成事業「高齢者における社会的不利の重層化の機序とその制御要因の解明」（研究代表者：杉澤秀博）の助成を受けて行った。共同研究者は、原田謙氏（実践女子大学）、杉原陽子氏（首都大学東京）、柳沢志津子氏（徳島大学）、新名正弥氏（未来工学研究所）、北島洋美氏（日本体育大学）である。

(2) 透析患者・家族に対する社会的支援に関する研究

1) 要介護高齢透析患者の家族の介護負担に関する研究：透析を受けていない要介護高齢者の家族との比較

本研究では、要介護認定されている高齢透析患者の家族の介護負担が透析を受けていない要介護高齢者の家族の介護負担と比較して大きいか否かを評価した。介護負担は、役割緊張、情緒的

消耗、介護満足度によって評価した。さらに、この3指標の関連については、要介護の高齢透析患者の介護が、直接的に家族の情緒的消耗を高めるとともに介護満足度を低める経路と、役割緊張を介して間接的にも両指標に影響する経路を設定した。両グループの交絡要因（要介護者の身体的・認知的健康・問題行動、介護者の年齢、性、高齢者との続柄など）の分布の違いが介護負担に与える影響を調整するため傾向スコア法を用いた。分析対象は要介護認定の高齢透析患者の家族については242人、透析を受けていない要介護高齢者の家族については335人であった。分析の結果、情緒的消耗については、要介護の高齢透析患者の家族では透析を受けていない要介護高齢者の家族と比較して役割緊張が有意に高く、そのことが情緒的消耗を有意に高めていること、介護満足度については、役割緊張を介さずに直接的に透析を受けているか否かから影響を受けていることが明らかとなった。要介護の高齢透析患者の家族の介護負担は、一般の要介護高齢者の家族と比較してより一層深刻であることが示唆された。

以上の研究は、透析医療研究会（研究代表者：杉澤秀博）の研究の一環として、篠田俊雄氏（日本透析医会）、清水由美子氏（東京慈恵会医科大学）、熊谷たまき氏（大阪市立大学）、杉崎弘章氏（日本透析医会）、杉原陽子氏（首都大学東京）と共同で行っている。

2) 透析医療機関における災害準備に関する研究

本研究では、①透析医療施設における震災への備えの現状把握と備えに関連する要因を、施設の防災担当の責任者を対象とした量的調査によって解明すること、②震災への備えが進んでいる施設の防災担当の責任者を対象とした質的調査によって、備えの進捗プロセスを明らかにすることを目的とした。量的調査は日本透析医会の会員が属する透析医療施設全数（904施設）の防災担当の責任者に実施し、質的調査は、量的調査の結果、備えが進んでいる施設の防災担当の責任者15名を対象に実施することとした。今年度は、量的調査を実施し、517施設から回答を得た。次年度に、量的調査のデータを分析するとともに、質的データの収集と分析を行う予定である。

以上の研究は、透析医療研究会（研究代表者：杉澤秀博）の研究の一環として、篠田俊雄氏（日本透析医会）、清水由美子氏（東京慈恵会医科大学）、熊谷たまき氏（大阪市立大学）と共同で行っている。

(3) 高齢者の起業・就業推進に関連する要因

本研究の目的は、年齢に関係なく就業を継続できる選択肢としての「起業・開業」をどのように成功させていくか、その要因を中高年者の開業経験者を対象とした調査で明らかにすることにある。着目した要因は社会的支援であり、中高年向けの融資や創業支援などの公的支援と、仕事上の知り合いや友人・知人などの個人的なつながりによる支援が開業の成功に与える影響を解明した。開業の成功の可否は、予想月商達成の可否、開業後の収入の増減で測定した。調査対象は、開業時年齢が40～64歳、2005年以降に初めて起業・開業を実現した男性であり、この条件に合う対象者をウェブ調査会社のパネルから抽出した。分析に際しては、職務経験、開業時年齢、開業した職種、学歴、開業資金などの影響を調整した。分析の結果、予想月商の達成には経営経験が有意に影響していたとともに、開業後の収入の増加には営業経験が、その減少には開業時の

年齢が有意に影響していた。社会的支援は、予想月商達成、開業後の収入の増減のいずれに対しても有意な影響はなかった。本研究は、2019年度「学内学術研究振興費」（研究代表者：杉澤秀博）の助成を受けて行った。共同研究者は中谷陽明氏（桜美林大学）、島影真奈美氏（桜美林大学）である。

3. 研究業績

【論文】 1) 査読付き

- 1) Sugisawa, H., Sugihara, Y., Kobayashi, E., Fukaya, T., & Liang, J. 2019. The influence of life course financial strains on the later-life health of the Japanese as assessed by four models based on different health indicators. *Ageing and Society*, 39 (12) , 2631-2652.
- 2) Sugisawa, H., Sugihara, Y., & Nakatani, Y. 2019. Long-term care preference among Japanese older adults: Differences by age, period and cohort. *Ageing and Society*, 1-25.
- 3) Sugisawa, H., Harada, K., Sugihara, Y., Yanagisawa, S. & Shimmei, M. 2019. Time perspectives as mediators of the associations between socio-economic status and health behaviours in older Japanese adults. *Psychology & Health*, 1-17.
- 4) Sugisawa, H., Harada, K., Sugihara, Y., Yanagisawa, S., & Shinmei, M. (n.d.). Health, psychological, social and environmental mediators between socio-economic inequalities and participation in exercise among elderly Japanese. *Ageing and Society*, 1-19.
- 5) Sugisawa, H., Shinoda, T., Shimizu, Y., Kumagai, T., Sugisaki, H., & Sugihara, Y. 2019. Caregiving for Older Adults Requiring Hemodialysis: A Comparison Study. *Therapeutic Apheresis and Dialysis*.
- 6) Sugisawa, H., Shinoda, T., Shimizu, Y., Kumagai, T. & Sugisaki, H. 2019. Psychosocial Mediators between Socioeconomic Status and Dietary Restrictions among Patients Receiving Hemodialysis in Japan. *International Journal of Nephrology*, 2019, Article ID 7647356, 9 pages.
- 7) Sugisawa, H., Harada, K., Sugihara, Y., Yanagisawa, S. & Shimmei, M. 2020. Social Networks' Health Habits Over Life Course and Late-life Health Habits *American Journal of Health Behavior*, 44 (1) , 100-117.
- 8) Sugisawa, H., Sugihara, Y. 2020. Mediators and Moderators of the Association between Living Alone and Psychological Distress among Japanese Older Adults. *Family & Community Health*. [in press]
- 9) 柳沢志津子, 杉澤秀博, 原田謙, 杉原陽子. 2019. 高齢者自身と同質的なメンバーで構成される地域組織への参加要因 : 高齢者と地域組織の特徴に着目して. *応用老年学*, 13 (1) , 27-36.
- 10) 牛嘯塵, 杉澤秀博. 2019. 中国都市部における障がいのある高齢者とその子ども援助者の介護サービス利用希望の一致に関する研究. *老年社会科学*, 41 (3) , 292-305.

- 11) 熊谷たまき, 杉澤秀博. 2019. 中年期の血液透析患者における負担感が抑うつ状態に与える影響. 日本在宅ケア学会誌, 22 (2), 64-71.
- 12) 牧野公美子, 杉澤秀博, 白柳聡美. 2020. 施設内看取りを代理意思決定し看取る過程で家族が経験した精神的負担と代理意思決定に対する思い. 老年看護学, [印刷中].
- 13) 青木宏昌, 杉澤秀博, 青木宏心. 2020. 高齢者介護施設に勤務する介護福祉士養成大学卒業者の介護福祉士としてのキャリア継続要因, 老年学雑誌, [印刷中].
- 14) 小池友佳子, 杉澤秀博, 杉原陽子, 清水由美子. 2020. 要支援高齢者の身体活動に対するヘルスリテラシー及び社会的サポートの影響—健常高齢者との比較—. 老年学雑誌, [印刷中].
- 15) 小林由美子, 杉澤秀博, 長田久雄, 刈谷亮太, 殿原慶三, 石原房子. 2020. 地域在住高齢者の健康関連の逆境に対するレジリエンスの分析枠組みに関する質的検討. 老年学雑誌, [印刷中].
- 16) 島影真奈美, 杉澤秀博. 2020. ホテル業界における高齢従業員活用とその関連要因. 老年学雑誌, [印刷中].
- 17) 牧野公美子, 杉澤秀博. 2020. 認知症高齢者の終末期医療と看取り場所を最終決断した遺族の代理意思決定に対する「満足感」と「後悔」に関連する要因. 老年学雑誌, [印刷中].
- 18) 堀口久枝, 杉澤秀博. 2020. ひとり暮らし要介護高齢者に対する住民による支援の過程—住民の視点から—. 老年学雑誌, [印刷中].

【論文】 2) 査読なし

- 1) 杉澤秀博. 2019. 生活支援における高齢者の互助—その可能性と問題点. エイジングアンドヘルス, 91, 18-21.

【学会発表, 座長】 (筆頭著者のみ)

- 1) 杉澤秀博, 他. ライフコース上の社会経済階層の高齢期の健康に対する影響: 若年・中年期および時期による差異. 日本老年社会学会第61回大会, 仙台市. 2019.6.7-6.8.
- 2) 杉澤秀博 (座長). 高齢者にとって住みよい社会的・物理的な環境とは何か~高齢者の生活環境を考える. 第14回日本応用老年学会大会. 京都市. 2019.10.19-10.20.
- 3) Sugisawa, H. Socioeconomic Status Disparities in Late-Life Health in Japan. 2019 Global Symposium on Ageing and Low Fertility. Soul. 2019.12.2-12.3

【科研費などの助成金】

- 1) 科研費. 高齢者における社会的不利の重層化の機序とその制御要因の解明 (研究代表者).
- 2) 学内学術研究振興費. 高齢者の起業・就業推進に関連する要因 (研究代表者).

1. 研究課題

介護予防に関する研究

2. 研究活動の概要

転倒に対する検知センサー付きスマホならびにPC管理システム等の開発研究に関して、研究結果をまとめている。

スピリチュアリティに焦点を当てた健康生活の支援に関する研究のまとめをおこない、結果発表などを行った。

東京都中央区内で、認知症予防活動をも想定した、世代間交流プログラムの企画、運営に参加、協力した。

また、東京都立川市の老人ホームにおいて、転倒予防プログラムとして運動・体操教室を継続している。

ダイヤ財団とともに考案したプログラム（ハッピープログラム）による地域高齢者のうつ予防を目的とした活動・研究を横須賀市などで継続中である。また、多くの自治体、組織などにプログラムの内容を紹介するための講演会活動も行っている。

3. 研究業績

【論文】

- 1) 荒川武士、煙山翔子、岡村唯、小林久美子、下川龍平、松本直人、新野直明：回復期リハビリテーション病棟入院時の栄養状態の実態と関連要因の検討
理学療法学、査読有、46巻、360-365、2019
- 2) 荒川武士、石田茂靖、佐藤祐、森田祐二、下川龍平、煙山翔子、岡村唯、新野直明：脳血管障害者の嚥下障害に関連する運動要因の検討、理学療法学、査読有、46巻、1-8、2019
- 3) 松村剛志、新野直明：在宅パーキンソン病患者におけるホームエクササイズの継続要因の探索、日本在宅ケア学会誌、査読有、23巻、63-72、2019

【その他の活動】

- 1) 「高齢者のこころの健康について」、横須賀市ハッピープログラム研修、2019年7月
- 2) 「高齢者のこころの健康についてーうつを中心に」、ハッピープログラム講演会、2019年8月、9月
- 3) 「糖尿病の基礎知識」、社会福祉法人至誠学舎立川至誠ホーム 国分寺地域相談センターなみき介護予防教室、2019年9月
- 4) 「生活場面からアセスメント生活リズム（睡眠） 薬物による影響のアセスメント」、認定看護師教育課程 認知症看護コース、2019年10月
- 5) 「老年医学 高齢者特有の病気・疾患」、多摩市市民講座老年学入門、2019年12月

1. 研究課題

- (1) 高齢者の介護予防及びヘルスプロモーションに関する調査研究
- (2) 高齢社会の課題解決に向けたアクションリサーチに関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者の介護予防及びヘルスプロモーションに関する調査研究

①北海道H市在住の65歳以上の住民を対象として、ウォーキングプログラム・講話・フォトボイスを取り入れた介護予防教室を計13回（2週間に1回90分）開催した。参加者は男女34人であった。このうちの7人にフォトボイスに関する効果と課題についてFocus group interviewを行なった。逐語録から抽出された79枚のカードから、6枚の最終ラベル（思考の促進、相互理解、自己理解、視野と行動の拡大、参加者の課題、プログラムの課題）が抽出された。これらのことから、フォトボイスを取り入れたプログラムは、参加者をエンパワメントし、生活機能維持への波及効果があることが示唆された（日本応用老年学会で発表）。

②東京都A市で開催した高齢者向けうつ予防教室に参加し、その後、グループで自主的に活動を継続している参加者のうち、協力の得られた6名を対象として活動を継続する上で必要とする支援についてFocus group interviewを行った。活動を継続するうえで必要な要素として「行政の支えの基での活動」「活動できる施設の確保」「後継者となるリーダーや支援者の養成」「新規参加者の勧奨」「自主グループのPR」「参加者間の協働」「気遣い合う関係の形成」「簡単・気楽にできる活動内容」が導き出された。これらの結果から、自主活動は行政からの支えが基盤となっており、身近な施設の充実や活動参加のきっかけづくりへの支援、また、参加者同士の協働が促進するように見守り、支援することが必要と考えられた（日本老年社会科学会で発表）

③神奈川県綾瀬市における要介護認定率の低いA地区と高いB地区に住む高齢者の基本属性、健康状態、趣味・習慣的活動、ソーシャル・キャピタル等の違いを明らかにすることを目的に行った郵送調査（2017年度）で得られたデータに基づき、結果の概要を地域住民向けに報告するとともに、その一部を作業療法学会誌に投稿した。さらに、綾瀬市の「多様性自発型社会参加促進事業」の一環として地域の活動団体の代表者及びシルバー人材センターの会員を対象として地域活動の活性化に向けたワークショップを2回実施し、「活動に参加するきっかけづくり」や「どのような体験教室があると良いか」などについて参加者の意見をまとめた。

(2) 高齢社会の課題解決に向けたアクションリサーチに関する研究

①アクションリサーチの普及と技法の共有を目的として、日本公衆衛生学会（高知）において自由集会を開催した。東京都内で取り組んでいる認知症の人の介護家族会と研究者が協働して、認知症の人と家族介護者にやさしい地域づくりのアクションリサーチにおける第1フェーズでのプロセスと住民の変化について報告した。当事者が問題の発掘の過程から関わることの意義、支援方法等について参加者と情報交換を行った。

②科学研究費による「当事者参加型アクションリサーチによる認知症の人と家族介護者にやさしい共生社会創造」研究では、町田市認知症友の会のメンバーと協働して行ったアンケート調査結果について概要版を作成し、6回に分けて、家族介護者、高齢者支援センター職員、シルバー人材センター会員等を対象として報告会を行った。参加者は約300名であった。参加者からの質問、要望、感想などの記録及び参加者を対象としたワークショップを通じて得られた情報を基に、課題解決に向けたプロジェクトを立ち上げることが次年度の目標である。

③これまでのアクションリサーチによる実践研究の総まとめとして、書籍『アクションリサーチの戦略-住民主体の健康なまちづくり』を刊行した。対象とする読者は、保健福祉系の専門家・大学院生、行政の保健・福祉・介護系の担当者などである。

3. 研究業績

【著書】

- 1) 芳賀 博 編著、アクションリサーチの戦略 -住民主体の健康なまちづくり-、ワールドプランニング、2020年3月

【学会発表】

- 1) 佐藤美由紀、若山好美、吉田裕人、芳賀博、アクションリサーチによる地域のつながりづくりの効果と課題、第61日本老年社会学会、仙台、2019.6.8
- 2) 安順姫、芳賀博、佐藤美由紀、うつ予防教室終了後の自主活動継続のための支援のあり方、第61日本老年社会学会、仙台、2019.6.8
- 3) 佐藤敬広、吉田裕人、植木章三、犬塚剛、芳賀博、地域高齢者の将来の医療費に影響を与える諸要因の検討、第78回日本公衆衛生学会総会、高知、2019.10.24
- 4) 犬塚剛、植木章三、吉田裕人、佐藤敬広、芳賀博、地域高齢者における生きがい意識の低下の抑制に関連する要因、第78回日本公衆衛生学会総会、高知、2019.10.24
- 5) 植木章三、佐藤敬広、片倉成子、犬塚剛、吉田裕人、安斎紗保理、柴喜崇、本間洋子、芳賀博、どのような中山間地域在住高齢者が携帯端末を有効利用しているか？第78回日本公衆衛生学会総会、高知、2019.10.24
- 6) 佐藤美由紀、安斎紗保理、長田久雄、芳賀博、認知症の人の家族介護者における孤立感と関

- 連要因 アクシオンリサーチによる取組み、第78回日本公衆衛生学会総会、高知、2019.10.24
- 7) 植木章三、芳賀博、佐藤美由紀（世話人）、認知症の人と家族介護者にやさしいまちづくり
－アクションリサーチによる取組み－、第78回日本公衆衛生学会総会、自由集会、高知、
2018.10.23
- 8) 佐藤敬広、吉田裕人、植木章三、芳賀博、地域高齢者の主観的な健康度および起居動作に与
える諸要因の検討、第14回日本応用老年学会、京都、2019.10.20
- 9) 服部ユカリ、牧野志津、大坪智美、野中雅人、芳賀博、介護予防教室にフォトボイスを導入
した効果に関する研究－参加者のFGIから－、第14回日本応用老年学会、京都、2019.10.20

【科研費などの助成金】

- 1) 科学研究費 基盤研究（C）
研究課題名：フォトボイスを用いた高齢者をエンパワメントする介護予防プログラムの開発
（分担研究）
- 2) 科学研究費 基盤研究（C）
研究課題名：当事者参加型アクションリサーチによる認知症の人と家族介護者にやさしい共
生社会創造（分担研究）

【その他の研究活動】

- 1) 笹川スポーツ研究助成：住民が主体的に提案したアダプテッド・スポーツの普及とその効果
（共同研究）
- 2) 講演：住民主体の活動を促すアクションリサーチの展開、第84回日本健康学会総会
連携研究会セミナー『アクションリサーチと保健活動』、長崎大学医学部 坂本キャンパ
ス、2019年11月3日
- 3) 講演：アクションリサーチ入門、2019年度日本健康教育学会主催セミナー、帝京大学板橋
キャンパス、2019年11月10日

1. 研究課題

- (1) 高齢者の就労継続に関連する要因の研究
- (2) 高齢者の栄養状態に関連する要因の研究
- (3) 中高年労働者の健康管理のあり方に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者の就労継続に関連する要因の研究

都市部高齢就業者の就労継続に関連する要因を明らかにすることを目的とした。ベースライン調査は2016年に東京都A区および川崎市B区に居住する65～84歳の109,103人から無作為抽出した6,773人を対象とし、郵送法により、属性、既往歴、社会活動、就労状況、主観的経済状態、精神状態質問票WHO-5J、老研式活動能力指標などの調査を行った。2018年に同対象に対し同様の方法にて追跡調査を行い、2016年の調査に有効回答を得た3,116人の内、2018年の調査に有効回答を得た1,561件を分析対象とした。性別・就労形態別に2年間の就労形態の変化を比較した後、2016年に何らかの形で就労していた833名について、多項ロジスティック回帰分析にて2年後の就労形態（基準カテゴリー：無職）に関連する要因を検討した。2016年調査時、男性の37.3%（1,351名中）、女性の21.7%（1,765名中）（専業主婦・主夫を除く）が何らかの職業に従事していた。パート従業の主婦・主夫を除くとサービス職に従事する者が16%と最も多かった。就労形態の2年間の推移をみると、フルタイム、定期的就労群の2年間の離職は75歳未満で10～20%にとどまっていた。一方、不定期就労群は、75歳以上になると、2年間で約半数が離職していた。就労継続に関連する要因の多変量解析の結果、フルタイムでの就労継続には、年齢が比較的低いこと、男性、心疾患既往が無いこと、経済的ゆとりが無いこと、サービス職であることが有意に関連していた。週35時間未満での就労継続には、年齢が比較的低いこと、精神的状態が良いこと、心疾患既往が無いこと、経済的ゆとりが無いことが有意に関連していた。不定期就労での就労継続には、心疾患既往が無いこと、サービス職であることが有意に関連していた。高齢期の就労維持には、心疾患の予防と管理がとくに重要であること、経済的自立のため無理して働いている高齢者への健康管理がとくに重要な課題となること、サービス職は、高齢期の就労を維持しやすい職業であることなどが明らかとなった。

(2) 高齢者の栄養状態に関連する要因の研究

低栄養のリスクが高いとされている農村部に在住する後期高齢者の栄養状態の実態ならびに関連する要因を明らかにすることを目的とした。群馬県A村在住の後期高齢者健康診査の受診対象1,721名を対象とし、属性、食生活、身体・生活機能、精神状態（WHO5J）、医療状況、社会活動などについて郵送調査を実施した。また、対象のうち2019年度の後期高齢者健康診査を受診した482名について栄養状態（BMI、血清アルブミン）を測定した。BMIは、日本人の食事摂取基準2015年版の年代別望ましいBMIをもとに、やせ群（BMI21.5未満）、普通群（BMI21.5以上25.0未満）、肥満群（BMI25.0以上）の3区分に分類した。BMI区分および血清アルブミンに関連する要因を検討した。調査対象者の一人暮らしの比率は男性が15.6%、女性は16.8%とほぼ同じであり、一人暮らし群と同居群の栄養状態には有意な差はみられなかった。本対象では、やせが全体の23.3%にみられた一方、肥満が全体の39.7%と多く、低栄養対策だけでなく肥満対策も重要な集団と考えられた。血清アルブミン値は男性が4.20g/dL、女性が4.22 g/dLと比較的良好であったが、80歳以上で低くなる傾向がみられ、女性では80歳以上で有意に低くなっていた。日常の買い物に不便を感じる人は37.5%と比較的多く、日常の買い物に不便を感じている人は、やせが多い傾向がみられたが有意ではなかった。単変量解析では、やせ群のWHO5J得点が有意に低かった。また、年齢を制御変数とした偏相関係数では血清アルブミンと男性のWHO5J得点との間に有意な正の相関が認められた。一般線形モデルにて血清アルブミンに関連する要因を多変量解析した結果、年齢が高いほど血清アルブミンが低くなる関係、WHO5J得点が高いほど血清アルブミンが高くなる関係、週3回以上朝食の欠食がある場合に血清アルブミンが低くなる関係が認められた。今回の調査は横断的調査であったため、今後縦断的研究を行い、栄養状態の変化を指標とした分析により栄養状態に影響する要因を明確にする必要がある。

(3) 中高年労働者の健康管理のあり方に関する研究

都市部高齢就業者の就労継続に関連する要因を明らかにすることを目的とした。2016年8月に首都圏2地域に在住する65～84歳の高齢者109,103人から無作為抽出した6,773人に対し実施した。健康状況、就業状況、社会活動、経済状態などに関する郵送調査に有効回答を得た3,116人に対し、2018年に同様の調査を実施し、有効回答を得た1,561件の内、2016年に何らかの形で就労していた者833名を分析対象とした。2018年の就労形態（基準カテゴリー：無職）を従属変数とし、性別、年齢、WHO-5-J、老研式活動能力指標、がん・脳卒中・心疾患の既往、経済的ゆとり、サービス職従事の有無を独立変数とした多項ロジスティック回帰分析にて就労継続に関連する要因を検討した。2016年の調査時には対象男性の37.3%、女性の21.7%が就業していた。就労形態の2年間の推移をみると、フルタイム、定期的就労群の2年間の離職は75歳未満で10～20%にとどまっていた。一方、不規則就労群は、75歳以上では2年間で約半数が離職していた。多項ロジスティック回帰分析の結果、フルタイム就労の継続には、年齢が低いこと、男性、心疾患既往が無いこと、経済的ゆとりが無いこと、サービス職であることが、週35時間未満の就労継続には、年齢が低いこと、精神的状態が良いこと、心疾患既往が無いこと、経済的ゆとりが無いこと

が、不定期就労での継続には、心疾患既往が無いこと、サービス職であることが有意に関連していた。前期高齢期では8割以上は2年以上継続して働けること、高齢期の就労維持には、心疾患の予防と管理がとくに重要であること、就労の維持には、経済的ゆとりがないことが共通して関連していることから経済的自立のため無理して働いている高齢者が存在している可能性があること、サービス職は高齢期の就労を維持しやすい職業であることなどを明らかにした。

3. 研究業績

【著書】

- 1) すぐわかるジェロントロジー, 社会保険出版社, 東京, 2019.

【論文】

- 1) ブラナン野口純代, 渡辺修一郎, 橋本由美子, 長田久雄: ユニット型特養の施設環境と認知症利用者の生活の質との関連. 応用老年学, 13 (1) : 17-26, 2019.
- 2) 稲葉陽二, 藤原佳典, 小林江里香, 野中久美子, 倉岡正高, 田中元基, 村山幸子, 松永博子, 安永正史, 村山洋史, 渡辺修一郎: 世代間交流と社会関係資本の継承 - 長野県須坂市調査と首都圏2自治体調査の比較からの知見. 政経研究, 56 (1) : 69-97, 2019.
- 3) 渡辺修一郎: 巻頭言: 加齢効果? 世代効果? 時代効果?. Dia News, 97, 3, 2019
- 4) 橋本由美子, 渡辺修一郎, 野中久美子, 小池高史, 長谷部雅美, 村山陽, 鈴木宏幸, 深谷太郎, 小林江里香, 藤原佳典: 独居高齢者の配偶関係からみた類型が2年間の健康状態の変化に及ぼす影響 - 首都圏高齢者の地域包括的孤立予防研究 (CAPITAL study) より. 日本公衆衛生雑誌, 66 (3) , 129-137, 2019.
- 5) 鈴木知明, 渡辺修一郎: 地域在住高齢者の入浴時の循環動態反応 - 浸漬方法・温度の違いから -. 日本温泉気候物理医学会雑誌, DOI : <https://doi.org/10.11390/onki.2325>, 2019.
- 6) Nonaka K, Fujiwara Y, Watanabe S, Ishizaki T, Iwasa H, Amano H, Yoshida Y, Kobayashi E, Sakurai R, Suzuki H, Kumagai S, Shinkai S, Suzuki T.: Is unwilling volunteering protective for functional decline? The interactive effects of volunteer willingness and engagement on health in a 3-year longitudinal study of Japanese older adults. *Geriatrics and Gerontology International* 19 (7) : 673-678, 2019.
- 7) Takuya Ueda, Yoshitaka Shiba, Shuichiro Watanabe: Evaluating the seasonal variations in the circulatory dynamics of community-dwelling older people while exercising outdoors in the early morning. *Journal of Physical Therapy Science* 32 (2) : 98-103, 2020.

【学会発表】

- 1) 森田泰裕, 新井智之, 渡辺修一郎: 地域在住高齢者における5年後の新規要介護発生と基本チェックリストとの関連, 第61回日本老年医学会学術集会, 仙台市, 2019年6月6日
- 2) 高塚奈津子, 新井智之, 渡辺修一郎: 地域在住高齢者における歩行能力自己評価に与える「うつ」の影響, 第61回日本老年医学会学術集会, 仙台市, 2019年6月7日
- 3) 石橋智昭, 森下久美, 中村桃美, 大坪英二郎, 塚本成美, 松田文子, 渡辺修一郎: シルバー人材センターへの入会者像の変化—3時点10年間の比較, 日本老年社会科学会第61回大会, 仙台市, 2019年6月7日
- 4) 新井智之, 森田泰裕, 高塚奈津子, 藤田博暁, 岡持利亘, 阿久澤直樹, 渡辺修一郎: 住民主体の自主グループ活動の要介護予防効果の検証, 第61回日本老年医学会学術集会, 仙台市, 2019年6月8日
- 5) 渡辺修一郎: 都市部高齢就業者の就労継続に関連する要因, 自主企画フォーラム4 介護福祉領域における高齢者就労の現状と課題, 日本老年社会科学会第61回大会, 仙台市, 2019年6月8日
- 6) 森下久美, 石橋智昭, 中村桃美, 大坪英二郎, 塚本成美, 松田文子, 渡辺修一郎: 会員の認知機能低下に対するシルバー人材センターの意識, 日本老年社会科学会第61回大会, 仙台市, 2019年6月8日
- 7) Takashi Saitoa, Angelberth Baia, Nobuko Matsuic, Kazuhiro P. Izawad, Shuichiro Watanabe, Alfred Malagisaf: A retrospective observational study reviewing characteristics of inpatients receiving rehabilitation services in West New Britain Provincial Hospital. Medical Society of Papua New Guinea 55th Symposium, Port Moresby, Papua New Guinea, 2019.9.3
- 8) 渡辺修一郎: 食事からみたちょうどよい生活習慣とは?, シンポジウム1「健康はつくるもの～高齢者に“ちょうどよい生活習慣”を考える」, 第14回日本応用老年学会, 京都市, 2019年10月20日
- 9) 橋本由美子, 渡辺修一郎, 野中久美子, 小池高史, 長谷部雅美, 村山陽, 鈴木宏幸, 深谷太郎, 小林江里香, 藤原佳典: 独居高齢者の配偶関係からみた類型と精神的健康状態および社会的役割との関連, 第14回日本応用老年学会, 京都市, 2019年10月20日
- 10) 藤原佳典, 倉岡正高, 野中久美子, 田中元基, 村山幸子, 松永博子, 根本裕太, 高橋知也, 村山浩史, 稲葉陽二, 村山陽, 渡辺修一郎, 小林江里香: 働く高齢者における職種別にみたジェネラティビティの差異, 第14回日本応用老年学会, 京都市, 2019年10月20日
- 11) 野中久美子, 倉岡正高, 村山幸子, 根本裕太, 村山陽, 小林江里香, 村山洋史, 渡辺修一郎, 福島富士子, 藤原佳典: 多世代共創社会のまちづくり; 多世代交流サロンで助け合いを促す運営手法, 第78回日本公衆衛生学会総会, 高知市, 2019年10月23日
- 12) 村山幸子, 倉岡正高, 野中久美子, 根本裕太, 村山陽, 小林江里香, 村山洋史, 渡辺修一郎, 福島富士子, 藤原佳典: 多世代共創社会のまちづくり: 住民主体による挨拶運動の立ち上げと運営手法, 第78回日本公衆衛生学会総会, 高知市, 2019年10月23日

- 13) 村山陽, 野中久美子, 倉岡正高, 村山幸子, 根本裕太, 小林江里香, 村山洋史, 渡辺修一郎, 稲葉陽二, 藤原佳典: 多世代共創社会のまちづくり: 多世代交流がジェネラティブティの醸成に与える影響, 第78回日本公衆衛生学会総会, 高知市, 2019年10月23日
- 14) 西中川まき, 桜井良太, 長谷部雅美, 村山陽, 西真理子, 渡辺修一郎, 藤原佳典: 若年層・中年層・高年層における栄養バランスの良い食事摂取頻度の関連要因の検討, 第78回日本公衆衛生学会総会, 高知市, 2019年10月24日
- 15) 藤原住典, 桜井良太, 倉岡正高, 野中久美子, 村山幸子, 根本裕太, 村山陽, 村山洋史, 渡辺修一郎, 小林江里香: 地域高齢者における健康無関心層の実態と関連要因の解明, 第78回日本公衆衛生学会総会, 高知市, 2019年10月25日
- 16) 根本裕太, 倉岡正高, 野中久美子, 田中元基, 村山幸子, 松永博子, 村山陽, 小林江里香, 村山洋史, 渡辺修一郎, 稲葉陽二, 藤原佳典: 若年層と中年層における世代間交流が精神的健康に与える影響: 2年間の縦断研究, 第78回日本公衆衛生学会総会, 高知市, 2019年10月25日
- 17) Yumiko Hashimoto, Shuichiro Watanabe, Kumiko Nonaka, Takashi Koike, Masami Hasebe, You Murayama, Hiroyuki Suzuki, Taro Fukaya, Erika Kobayashi, Yoshinori Fujiwara: Relationship between types of elderly living alone and their mental health or social role, 11th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress, Taipei, 2019.10.24
- 18) Takuya Ueda, Yoshitaka Shiba, Shuichiro Watanabe: Seasonal fluctuations of circulatory dynamics of community-dwelling older people while exercising outdoors in the early morning, 11th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress, Taipei, 2019.10.25
- 19) Naoko Ito, Shuichiro Watanabe, Chiyo Inoue: Relationship between the body mass index and the self-assessment of physique, among community-dwelling elderly Japanese people, 11th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress, Taipei, 2019.10.26.
- 20) Shuichiro Watanabe, Yoshinori Fujiwara, Kumiko Nonaka, Masataka Kuraoka, Erika Kobayashi, Yuta Nemoto, Ushio Minami, Takashi Koike: Factors related to work retention for elderly workers in the metropolitan area in Japan over two years, 11th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress, Taipei, 2019.10.26.
- 21) Yasuhiro Morita, Tomoyuki Arai, Shuichiro Watanabe: Relationship between new long-term care insurance certification and Kihon Checklist after 5 years in community-dwelling elderly: Study based on sex and age group (Outstanding Oral Presentation Award Winner of 26 Oct), 11th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress, Taipei, 2019.10.26.
- 22) Masataka Ando, Naoto Kamide, Yoshitaka Shiba, Haruhiko Sato, Miki Sakamoto, Shuichiro Watanabe: Association between neighborhood environment and walking ability among

community-dwelling older people in Japan: A 1-year prospective cohort study, 11th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress, Taipei, 2019.10.26.

【科研費などの助成金】

- 1) 長寿医療研究開発費：長寿コホートの総合的研究「地域差研究・生活機能研究」（分担研究者）
- 2) 日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C））：高齢難聴患者の対処行動を支援するための患者・看護師への研修の開発（分担研究者）
- 3) 日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C））：地域在住高齢者の口腔機能向上を目指した呼吸筋トレーニングプログラムの確立（分担研究者）

【その他の研究活動】

- 1) 東京都健康長寿医療センター研究所，社会参加と地域保健研究チーム協力研究員として，社会参加と地域保健に関する研究に従事.
- 2) 世田谷区健康きたざわプラン推進委員として健康きたざわプランの評価に関する研究に従事.
- 3) 志木市介護保険事業計画策定委員会委員として志木市介護保険事業計画に関する調査研究に従事.
- 4) 公益財団法人大原記念労働科学研究所の客員研究員として高齢者の就労と健康に関する研究に従事.

1. 研究課題

農村のソーシャル・キャピタルを活用した地域包括ケアシステムのあり方に関する研究

2. 研究活動の概要

厚生労働省による地域包括ケアシステムの中で、自助・互助・共助・公助の4つの助けが効果的に機能することの重要性がいられている。地域の中で、人々のつながりをもとに醸成されるソーシャル・キャピタルを活用し、高齢者がいきいきと生活するためのケアシステムをいかに構築するかが喫緊の課題である。また、我が国の後期高齢者人口は前期高齢者人口を上回る状況が続くと予測されており、後期高齢者が地域の中でいかに高次生活機能を維持し活動的に生活できるかが喫緊の課題である。

これまで、農村で生活する人々の健康に資するソーシャル・キャピタルを「自然との共生」「農村ならではの信頼関係の維持」「農村の社会規範を重んじる」「農村であることを活かした社会参加とネットワーク」の視点で包括的に判定できる指標（農村SC指標）の開発を試みてきた。

そこで今年度は、特に後期高齢者の個人レベルの農村SCに着目し、高次生活機能との関連を明らかにするための分析を行った。農村SCは「農村SC指標総得点」のほか、下位尺度の「自然との共生」「農村ならではの信頼関係の維持」「農村の社会規範を重んじる」「農村であることを活かした社会参加とネットワーク」各得点を算出するとともに、老研式活動能力指標、JST版活動能力指標についてSpearmanの順位相関係数を算出した。農村SCの平均値は「農村SC総得点」は80点満点中、男性51.1点、女性53.1点、男女計52.2点であり、下位尺度についても若干女性が高い傾向がみられた。また、農村SC指標総得点および下位尺度項目と老研式活動能力指標との間には、多くの項目で有意な正相関が認められた。農村SC指標総得点および下位尺度項目とJST版活動能力指標との関連については、いくつかの下位尺度と正相関がみられたが、「新機器利用」では、負の弱い相関が認められた。

男性に比べ女性が社会活動への参加が盛んであるといわれており、居住地域のSCの認知に影響を及ぼしている可能性が推察される。また、老研式活動能力指標との相関が認められたことから、農村らしいSCをいかに維持していくのかが今後の課題であると考えられる。一方、JST版活動能力指標の新機種利用については、この年代の生活歴を考えると馴染みが薄く、このような結果になった可能性が高いと推察される。今後、仕事や日常生活でIT等を活用する年代ではどのように変化していくのか、ライフスタイルの変化に着目しながら農村SCとともに観察していく必要がある。

なお、本研究内容は、第8回日本公衆衛生看護学会（愛媛）で発表した。今後も、更なる調査・分析を行っていく予定である。

3. 研究業績

【学会発表】

- 1) 東條恵美, 井上智代. 労働者を対象としたストレスチェックに関する研究の動向. 第92回日本産業衛生学会 (愛知県) (2019.5)
- 2) 飯吉令枝, 井上智代, 駒形三和子. 豪雪地域に暮らす高齢者の健康や生活行動と運転免許返納の実態. 第78回日本公衆衛生学会総会 (高知県) (2019.10)
- 3) 伊藤直子, 渡辺修一郎, 井上智代. Association between the body mass index values and the self-assessed physique among the community-dwelling elderly in Japan. The 11th IAGG Asia / Oceania Regional Congress 2019 (台湾) (2019.10)
- 4) 高橋由香, 原田康江, 大湊純子, 井上智代. 基礎看護実習Ⅱで学生が感じる喜び 新潟県厚生農業協同組合連合会令和元年度看護部研究発表会 (新潟県) (2019.11)
- 5) 井上智代, 渡辺修一郎, 伊藤直子, 飯吉令枝, 田辺生子. 75歳以上高齢者の個人レベルの農村ソーシャル・キャピタルと高次生活機能との関連. 第8回日本公衆衛生看護学会学術集会 (愛媛県) (2020.1)
- 6) 久保野裕子, 井上智代. 我が国におけるポピュレーションアプローチの動向. 第8回日本公衆衛生看護学会学術集会 (愛媛県) (2020.1)
- 7) 田辺生子, 渡辺修一郎, 井上智代. 農村部在住の後期高齢者における食料品の入手事情と食品摂取多様性との関連. 第8回日本公衆衛生看護学会学術集会 (愛媛県) (2020.1)

【科研費などの助成金】

- 1) 科学研究費基盤研究 (C) 豪雪地域高齢者の運転免許返納後の健康・生活行動の維持とその要因に関する縦断的研究 (分担研究者)
- 2) 科学研究費基盤研究 (C) 地域在住高齢者の口腔機能向上を目指した呼吸筋トレーニングプログラムの確立 (分担研究者)

1. 研究課題

- (1) 乳製品（特にチーズ）の摂取と認知機能低下予防との関連性に関する研究
- (2) 市町村レベルにおける社会参加ともの忘れとの関連性の分析

2. 研究活動の概要

(1) 乳製品（特にチーズ）の摂取と認知機能低下予防との関連性に関する研究

超高齢社会においては高齢者の認知症の予防対策は喫緊の課題となっている。本研究では、認知機能と生活習慣および乳製品（特にチーズ）の摂取との関連性について、文献レビューおよび疫学的調査などを基盤とする包括的な研究を実施することを目的とする。

2019年度は日本老年学的評価研究（Japan Gerontological Evaluation Study, JAGES）調査の一環として、乳製品摂取と認知症の先駆症状とされている「もの忘れ」などについて調査を行ってきた。

(2) 市町村レベルにおける社会参加ともの忘れとの関連性の分析

【背景と目的】2013年に厚生労働省は「健康日本21（2次）」において、社会環境を整備することによって健康格差を縮小することを目標に掲げた。社会環境の状況を評価する「地域診断」の重要性は高まっているものの、市町村単位において、どの指標が有用であるかについては十分な検証はなされていない。本研究では、個人単位の分析で明らかにされている社会参加と認知症の前駆症状とされる「もの忘れ」との関連性の検証を通して、市町村単位における認知症予防施策に取り組む際に活用可能な地域診断指標の妥当性を検証することを目的とした。

【対象と方法】全国の105市町（ $n=338,659$ ；女性54.7%）を対象とした。データは第6期日常生活圏域ニーズ調査（2013年）や日本老年学的研究（JAGES）調査（2013年）を用いた。社会参加を行っている人の割合と、「もの忘れ」がある人の割合の相関について市・町を単位として検証した。社会環境変数として①単身高齢者の割合、②可住地人口密度、③最終学歴中学校以下の高齢者の割合、④課税対象所得を調整した偏相関分析を行った。

【結果】105市町の338,659人のうち、「もの忘れがある」と答えた人は22,734人（12.8%）であった。市・町単位で見ると、「もの忘れがある」者の割合の平均（年齢調整済）は19.0%（範囲：7.1% - 35.6%）であり、市・町間に最大5.0倍の差があった。また、仕事や趣味、ボランティア活動など、種類にかかわらず、年数回以上、社会参加している人の割合は平均（年齢調整済）75.0%（47.3%-89.1%）であり、市・町間に1.9倍の差があった。社会参加している人の割合と、

もの忘れがある人の割合の相関関係を分析した結果、年齢構造や社会環境変数の調整後でも、社会参加する人が多い市・町ほど、もの忘れがある人の割合は少なかった ($r = -0.72, p < 0.001$)。

【結論】全国105市町(338,659人)の調査データの分析を通して、社会参加する人の割合が多い市・町ほど、「もの忘れ」がある人の割合は少なかった。市町村単位における認知症予防施策を進める際に用いる地域診断指標として、社会参加する人の割合や「もの忘れ」がある人の割合を用いることは妥当である可能性が示唆された。

【本研究の意義】本研究の結果から、市町村単位で、どれぐらいの人が社会参加しているのかを把握し、地域住民が何らかの形で社会参加できるように環境を整備し、さらに社会参加を促すことで、認知症の前駆症状とされる「もの忘れ」の予防など健康なまちづくりや市・町間の健康格差の是正につながる可能性があると思われる。

3. 研究業績

【論文】

- 1) Yusuke Inoue, Seungwon Jeong. Did the Number of Older People Requiring Long-Term Care and Expenditure Increase after the 2011 Great East Japan Earthquake? Analysis of Changes over Six Years. *Int J Environ Res Public Health*, 2020(in press).
- 2) Yasuyuki Arai, Takao Suzuki, Seungwon Jeong, Yusuke Inoue, Masahiko Fukuchi, Yoshimichi Kosaka, Koji Nagashima, Hideki Ohta. Effectiveness of Home Care for Fever Treatment in Older People: A Case-control Study Compared with Hospitalized Care, *Geriatrics & Gerontology International*, 2020(in press)
- 3) Kazushige Ide, Taishi Tsuji, Satoru Kanamori, Seungwon Jeong, Yuiko Nagamine, Katsunori Kondo. Social Participation and Functional Decline: A Comparative Study of Rural and Urban Older People, Using Japan Gerontological Evaluation Study Longitudinal Data. *Int J Environ Res Public Health*, 17 (2) , 617, 2020. <https://doi.org/10.3390/ijerph17020617>
- 4) Tsuneo Nakamura, Taishi Tsuji, Yuiko Nagamine, Kazushige Ide, Seungwon Jeong, Yasuhiro Miyaguni, Katsunori Kondo. Suicide Rates, Social Capital, and Depressive Symptoms among Older Adults in Japan: An Ecological Study. *Int. J. Environ. Res. Public Health* 16(24), 4942, 2019. ①<https://doi.org/10.3390/ijerph16244942>
- 5) Anna Yamanouchi, Yoshihiro Yoshimura, Yumi Matsumoto, Seungwon Jeong. Validity of predictive equations for resting energy expenditure in sarcopenic older adults in long-term care. *Journal of Japanese Association of Rehabilitation Nutrition* 3(2), 243-252, 2019.
- 6) Seungwon Jeong, Yusuke Inoue, Katsunori Kondo, Kazushige Ide, Yasuhiro Miyaguni, Eisaku Okada, Tokunori Takeda, Toshiyuki Ojima. Correlations between Forgetfulness and Social Participation: Community Diagnosing Indicators. *Int. J. Environ. Res. Public Health* 16 (13) , 2426, 2019. doi:10.3390/ijerph16132426

【学会発表】

- 1) 中村恒穂, 辻大士, 鄭丞媛, 近藤克則. うつ割合とソーシャルキャピタルと自殺率－地域相関分析. 第78回日本公衆衛生学会総会, 2019.10.23, 高知県高知市
- 2) 鄭丞媛, 三浦聖子, 鈴木隆雄, 櫻井孝. 認知症高齢者における徘徊の発生予測に関する研究. 第9回日本認知症予防学会 (シンポジウム5: 認知症による徘徊予防のための現状と課題), 2019年10月18日, 名古屋
- 3) 荒井康之, 鄭丞媛, 井上祐介, 太田秀樹, 鈴木隆雄. 在宅医療における医療の質の評価指標に関する意識調査－医師・看護師は何を重視して在宅医療に従事しているのか?. 第1回日本在宅医療連合学会大会, 2019.7.14, 東京 (最優秀演題賞)

【科研費などの助成金】

- 1) 桜美林大学老年学総合研究所受託研究「乳製品 (特にチーズ) の摂取と認知機能低下予防との関連性に関する研究」 (受託研究者: 鄭丞媛) 平成31年度
- 2) 科学研究費基盤研究 (C) (一般, 課題番号17K04305) 「Age Friendly Cities (AFC) 指標の開発と信頼性・妥当性の検証」 (研究代表者: 鄭丞媛) 平成29度－平成32年度
- 3) 平成31年度革新的自殺研究推進プログラム (国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター) 「社会格差が自殺や精神的健康に及ぼす影響に関する社会疫学的影響評価研究」 分担研究者 (研究代表者: 近藤克則)

【その他の研究活動】

- 1) 岡山県介護予防効果測定事業評価
- 2) 岡山市SIBを活用した健康ポイント事業評価
- 3) 堺市「あ・し・た」プロジェクト事業評価

1. 研究課題

高等学校教育における高齢期の学習状況－教科学習プログラム調査

2. 研究活動の概要

高齢社会日本において、高齢期についての知識を持つことは、生涯発達、ライフステージの課題の観点から有効だと考える。高齢期の学習は、高齢者を支える側、自身の将来のこと・自身の日常として、捉え方や興味関心が学習者の年代によっても違ってくる。社会に出るまでの約20年、成人してから平均寿命までの年数は、その約4倍もあることを見た時、若年層に対する高齢期学習は、高齢者を支える福祉の観点だけでなく、自身のライフステージとして重要な意味を持つと考えられる。若年層に対して、高齢期についての学習をどのように取り扱い、教育が行われているのか、その実態を明らかにするために、その第一段階として、学校教育の中の高等学校教育に限定、対象とし、日本の教育構造、教科書に着目し、どの教育分野でどのような学習内容が取り上げられているかを調査するものである。

3. 研究業績

【その他の研究活動】

- 1) 講演講師 あじさい大学・相模原市地域活動支援事業公開講座
「シニアになった！ 何をしますか」
- 2) セミナー企画・実施
「オーストラリアの多文化主義と日本の多文化共生」埼玉県立吹上秋桜高等学校
- 3) 教育研究 ワークシートからみる講演学習の効果分析
- 4) 介護ロボット埼玉フォーラム参加

1. 研究課題

高齢者介護施設に勤務する介護福祉士養成大学卒業者の介護福祉士としてのキャリア継続要因

2. 研究活動の概要

介護福祉士養成大学を卒業し、高齢者介護施設に勤務している介護福祉士が介護福祉士としてのキャリアを継続する要因を明らかにすることを目的とし、実施した。

研究対象は、介護老人福祉施設または介護老人保健施設に5年以上同じ職場で介護福祉士として勤務し、介護福祉士養成大学を卒業した経歴をもつ人10名とした。このようなキャリア経験をもつ介護福祉士10人を対象にインタビューを実施し、分析は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて行った。分析の結果、以下の要因が抽出された。[]は概念、《 》はカテゴリーである。施設への就職は、《優遇面を意識した本意ではない就職》であった。その後、《大卒のキャリアに期待される役割とその実現のための取組み》という役割を担う中で、介護職を継続する意欲が醸成された。加えて継続意欲には《介護に対する意識が高い》《大学で習得した専門的知識が貢献》[利用者とのかわりに生きがい]も影響していた。以上、大卒者の活用を意図した職場環境と大卒者が大学で習得した専門知識によって介護福祉士としてのキャリア継続が図られていることが示唆された

1. 研究課題

社会福祉士および介護福祉士国家試験合格のための支援に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 介護福祉士国家試験・社会福祉士国家試験 受験対策図書の執筆

全国社会福祉協議会、中央法規出版、メディックメディアの受験対策図書等を執筆した。

(2) 社会福祉士国家試験 受験対策セミナーの講師

中央法規出版の受験対策セミナーの講師を務めた。

(3) 介護福祉士国家試験 受験対策セミナーの講師

静岡福祉大学、読売理工医療福祉専門学校、中央法規出版の受験対策セミナー講師を務めた。

(4) 介護職員初任者研修の講師

藤沢市社会福祉協議会の介護職員初任者研修の講師を務めた。

(5) 留学生等の支援

特定技能1号および在留資格「介護」を目指す外国人に対しての介護に関する集中講義の講師を務めた。

3. 研究業績

【著書】

- 1) 『社会福祉学習双書2019 第15巻 介護概論』共著、pp.168-176、澤田信子、大島憲子、井上千津子、岡田史、中山幸代、鈴木知佐子、石井享子、大根静香、伊藤八寿子、横井雅代、石井忍、久保田祐子、青木宏心、檜垣昌也、小櫃芳江、西井啓子、森由香子、全国社会福祉協議会、東京、2019年2月。
- 2) 『クエスチョンバンク 介護福祉士国家試験問題解説2020』共著、pp.95-100、青木宏心、赤羽克子、秋山美栄子、奥田紀久子、加藤英池子、後藤佳苗、佐伯久美子、櫻井恵美、佐々木

宰、鈴木政史、角田ますみ、竹田幸司、谷口泰司、中津川かおり、濱田竜也、林裕榮、松村美枝子、馬淵敦士、南牧生、宮崎伸一、メディックメディア、東京、2019年4月。

- 3) 『介護福祉士国家試験過去問解説集 2020』共著、pp.129、pp.138-141、青木宏心、石岡周平、伊東一郎、井上修一、岩川亮太、大田京子、太田つぐみ、大西典子、大谷佳子、亀島千枝、金美辰、小林哲也、白井孝子、竹田幸司、谷功、千葉安代、中岡勉、中島由佳、長山圭子、能田茂代、馬場千草、東野幸夫、東原由佳、廣瀬圭子、福島岳志、堀米史一、本間美幸、前田美貴、宮元預羽、八城薫、山下喜代美、山田誠峰、山田弥生、渡辺明広、渡邊祐紀、中央法規出版、東京、2019年4月。
- 4) 『介護福祉士国家試験 らくらく暗記マスター2020』共著、pp.14-70、青木宏心、佐伯久美子、松崎匡、中央法規出版、東京、2019年6月。
- 5) 『社会福祉士国家試験 らくらく暗記マスター2020』単著、pp.12-181、青木宏心、中央法規出版、東京、2019年6月。
- 6) 『介護福祉士国家試験 書いて覚える合格ドリル2020』共著、pp.14-20、pp.28-66、青木宏心、佐伯久美子、竹田幸司、渡邊祐紀、中央法規出版、東京、2019年5月。
- 7) 『おはよう21』、「介護福祉士国家試験 合格ナビ」単著、中央法規出版、東京、2019年4月号～2020年2月号（全11回連載）
- 8) 『外国人技能実習生（介護職種）のためのよくわかる介護の知識と技術』共著、pp.80-101、pp.174-182、青木宏心、石岡周平、片桐幸司、鎌田恵子、金圓景、佐伯久美子、清水正彦、白井幸久、竹田幸司、田中雅子、橋本由紀江、二渡努、中央法規出版、東京、2019年4月。

【その他の研究活動】

- 1) 介護福祉士国家試験受験対策講座 講師
 - ①読売理工医療福祉専門学校：制度系科目【東京】（2019年9月5日）
 - ②静岡福祉大学：制度系科目【静岡】（2019年9月25日）
 - ③静岡福祉大学：医療系科目、介護系科目【静岡】（2019年9月26日）
 - ④中央法規出版：全科目【大阪】（2019年12月7日）
 - ⑤静岡福祉大学：全科目【静岡】（2019年12月8日）
 - ⑥中央法規出版：全科目【東京】（2019年12月14日）
- 2) 社会福祉士国家試験受験対策講座 講師
 - ①中央法規出版：専門科目【仙台】（2019年11月30日）
 - ②中央法規出版：共通科目【仙台】（2019年12月1日）
 - ③中央法規出版：専門科目【東京】（2019年12月21日）
 - ④中央法規出版：共通科目【東京】（2019年12月22日）
 - ⑤中央法規出版：専門科目【大阪】（2020年1月11日）
 - ⑥中央法規出版：共通科目【大阪】（2020年1月12日）

3) 介護職員初任者研修 講師

- ①藤沢市社会福祉協議会：「自立に向けた介護」【神奈川】（2019年8月17日）
- ②藤沢市社会福祉協議会：「介護の基本的な考え方」【神奈川】（2019年9月21日）
- ③藤沢市社会福祉協議会：「快適な住環境整備と介護」【神奈川】（2019年9月21日）
- ④藤沢市社会福祉協議会：「介護過程の基礎的理解」【神奈川】（2019年11月13日）

4) 留学生等支援関係

- ①KAIGO日本語学院 集中講義【プノンペン】（2019年10月7日～8日）

5) 社会的活動

- ①社会福祉法人仁正会 評議員
- ②社会福祉法人相模翔優会 第三者委員
- ③カンボジア学校法人 KAIGO日本語学院 顧問

1. 研究課題

高齢者領域における音楽プログラムの可能性と課題

2. 研究活動の概要

高齢者対象の音楽プログラムは、各種施設や病院、地域、介護予防事業などにおいて、音楽療法、レクリエーションなどの名称で、定期的もしくは単発イベント等の枠組みとして幅広く実践されている。担当しているのは療法家、演奏家、施設などの各職種職員、地域のボランティアなど様々である。

高齢者像や求められる内容は、時間経過と共に変化している。実践を通して、改めて音楽プログラムのさらなる効果の可能性や課題を探ることを継続中である。

(1) 軽度認知障害高齢者対象の実践

メンタルクリニックでは、軽度認知障害高齢者を対象に音楽プログラムを実践している。精神保健福祉士、看護師、心理士などの職員も同席している。参加者はこのメンタルクリニックに通院している、もしくは通院していた高齢者である。

プログラムの内容は、着席のまま出来る体操、口腔ケア、音楽関連もしくは一般的な脳トレ問題、様々なジャンルの歌唱やトーンチャイムや小さな民族楽器を使用しての楽器活動、主に音楽に関連した回想法などである。

同席する職員は20～40歳代であり、使用する曲や時代背景を知らない事実があり、職員にも様々な刺激となっている。また、診察などの他の場面と違った反応や感情の表出は、情報として共有している。

(2) 認知症カフェにおける実践

上記のメンタルクリニックは東京都の認知症疾患医療センターとなっており、2019年度までは区の助成金を得て認知症カフェを開催してきた。軽度認知障害の本人や家族介護者、関係の諸機関職員などの様々な顔ぶれが参加している。

毎回主プログラムが設定され、その枠で音楽療法として実践する機会もある。また毎回の主プログラム前の時間には、参加者達との音楽のコーナーを担当している。これは主にクイズや雑学と共に2曲ほど歌う時間となっている。このひと時が、この場のまとまりができる時間として定着した。音楽のある認知症カフェとして、このカフェの特徴の一つとなっている。他地域の認知

症カフェへの参加や研修会、音楽プログラムの実践を通して、認知症カフェの可能性や課題を探ることも継続中である。

3. 研究業績

【その他の活動】

- 1) 大学看護学部看護学生対象の選択科目「スピリチュアルケア」で、音楽療法の講義を1コマ担当した。
- 2) 総合大学の選択科目「介護予防」で、健康福祉専攻学生ら、介護予防における音楽活用の視点での講義を1コマ担当した。
- 3) 市の委託事業である地域包括支援センターの家族介護者交流会で、家族介護者のメンタルケアを意識した音楽プログラムを試験的に導入した。
- 4) 住民主体の「認知症の人に優しい街づくり」イベント（市の助成金事業で地域包括支援センター後援）で、歌唱活動を披露する住民らの支援を担当した。
- 5) 住民主体型アクティビティ（区の助成）の一つとして、地域住民対象のアクティビティ活動の一つとして、介護予防を意識した音楽プログラムを実践した。

1. 研究課題

- (1) 要支援・要介護高齢者における主観的健康感の評価基準の特徴
- (2) 要介護認定率が低い地域に在住する高齢者の健康状態ならびに健康の社会的決定要因の特徴
- (3) 地域在住高齢者の社会経済的状況（SES）と余暇的生活行為の関連

2. 研究活動の概要

(1) 要支援・要介護高齢者における主観的健康感の評価基準の特徴

要介護認定を受けている高齢者の主観的健康感の判断基準を明らかにする質的研究を実施した。研究の成果として、主観的健康感の回答理由として〈病気・体調の安定〉、〈私なりの自立生活〉、〈周囲の人との良好な関係〉、〈私の中で変わらぬ自信〉、〈今の生活の中にある張り〉、〈老いや病と歩む〉の6つの要因が明らかになった。学術誌へ投稿すべく論文執筆中である。

(2) 要介護認定率が低い地域に在住する高齢者の健康状態ならびに健康の社会的決定要因の特徴

2017年に神奈川県綾瀬市と共同で実施した調査から、要介護認定率が低い地区の高齢者は日常生活の自立心、うつ傾向、主観的健康感、趣味・習慣活動の実施数、地域活動の実施頻度という心理・社会的健康が良好であることが明らかになった。健康の社会的決定要因では教育年数、暮らし向きの他に、地域の凝集性ならびに結束型ソーシャルキャピタルに差異が認められた。研究成果について、学術誌へ投稿し査読中である。

(3) 地域在住高齢者の社会経済的状況（SES）と余暇的生活行為の関連

2017年に神奈川県綾瀬市と共同で実施した調査を二次分析した。高齢者の余暇的生活行為は教育年数や暮らし向きと関連するばかりでなく、性別・居住形態とも関連が示された。研究成果を学術誌へ投稿すべく、論文執筆中である。

3. 研究業績

【論文】

- 1) 池田晋平, 佐藤さとみ, 高橋由紀, 田中克一, 酒井弘美: 東京都大田区における作業療法士の復職・就労支援の実態と課題, 作業療法 (印刷中) .

【学会発表】

- 1) 特養の所在学区中学生を対象とした学習支援を兼ねた子ども食堂の開設 (アクティブ福祉in東京'19, 東京, 2019年9月30日)
- 2) 高齢者における地域活動の頻度と地域コミットメントの関連の検討: 体力測定会の参加者を対象にした予備的調査 (第14回日本応用老年学会大会, 京都, 2019年10月20日)

1. 研究課題

- (1) 運動習慣のある地域在住高齢者の身体、精神機能、社会的紐帯などの縦断調査
(10年間の縦断調査)
- (2) 都内62区市町村における地域づくりによる介護予防の推進に関する調査

2. 研究活動の概要

- (1) **運動習慣のある地域在住高齢者の身体、精神機能、社会的紐帯などの縦断調査 (10年間の縦断調査)**
体操習慣のある地域在住高齢者の身体機能、生活機能および精神的健康度経年変化を明らかにするために、神奈川県相模原市のラジオ体操を実施している高齢者の身体機能測定、質問紙調査を実施した。
- (2) **都内62区市町村における地域づくりによる介護予防の推進に関する調査と発信**
都内62区市町村において、地域づくりによる介護予防推進のために、先進事例集を作成し、都内62区市町村へ提供した。

3. 研究業績

【論文】

- 1) Ueda T, Shiba Y, Watanabe S; Evaluating the seasonal variations in the circulatory dynamics of community-dwelling older people while exercising outdoors in the early morning. The Journal of Physical Therapy Science, 32 (2) , p98-103, 2020

【学会発表】

- 1) Ueda T, Shiba Y, et al.; Seasonal fluctuations of circulatory dynamics of community-dwelling older people while exercising outdoors in the early morning. The 11th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2019, 2019/10/25
- 2) Omori Y, Morio Y, Ueda T, et al.; Physical aptitude for employment in community-dwelling elderly people with mild cognitive impairment, The 11th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2019, 2019/10/25

- 3) 植田拓也、安永正史、江尻愛美、白部麻樹、伊藤久美子、高橋淳太、三木明子、河合恒、大淵修一。東京都における住民主体の通いの場づくりの支援の報告：東京都介護予防推進支援センターの支援の有無による通いの場数の変化。第14回日本応用老年学会大会，2019年10月20日
- 4) 植田拓也、畠山浩太郎、鹿内誠也、柴喜崇、渡辺修一郎。地域在住高齢者における早朝のラジオ体操実施の安全性外傷，疼痛の発生状況に着目した検討。第6回日本予防理学療法学会，2019年10月19日，広島国際会議場
- 5) 江尻愛美，安永正史，白部麻樹，伊藤久美子，三木明子，植田拓也，河合恒，大淵修一。住民主体の通いの場参加者が抱える課題は活動期間により異なるか－継続支援に向けて－。第78回日本公衆衛生学会総会，2019年10月24日
- 6) 杉山智哉、植田拓也、畠山浩太郎、鹿内誠也、柴喜崇。朝のラジオ体操会に参加する高齢者におけるストレス対処能力の関連因子。第6回日本予防理学療法学会，2019年10月19日，広島国際会議場
- 7) 志村恵里、安齋紗保理、植田拓也、山上徹也、大森圭貢、柴喜崇。自覚的認知機能低下における身体機能と健康関連QOLの関連，第6回日本予防理学療法学会，2019年10月19日，広島国際会議場
- 8) ト部吉文、大淵修一、植田拓也、中村睦美。東京都介護予防推進支援センターにおける広域アドバイザーとしてA区の支援を行った活動報告【第二報】，2019年10月19日，広島国際会議場
- 9) 江尻愛美、河合恒、安永正史、白部麻樹、伊藤久美子、三木明子、植田拓也、大淵修一。住民主体の通いの場における参加形態と課題認識、心理社会的健康の関連。第6回日本予防理学療法学会，2019年10月19日，広島国際会議場
- 10) 伊藤久美子、河合恒、白部麻樹、江尻愛美、安永正史、三木明子、植田拓也、大淵修一。地域づくりによる介護予防の担い手として関わりたいと考える者の特性～壮年期から前期高年期を対象とした調査より～。第6回日本予防理学療法学会，2019年10月20日，広島国際会議場

【その他の研究活動】

●講演

- 1) 植田拓也，地域包括ケアシステムと総合事業－リハビリテーション専門職に期待される役割－。新宿区在宅リハビリテーション連絡会研修，2020年1月24日
- 2) 植田拓也，地域づくりによる介護予防～住民主体の通いの場の役割～。三鷹市生活支援コーディネーター研修会，2020年1月22日，三鷹市役所
- 3) 植田拓也，医療から地域へ－地域で求められるリハビリテーション専門職の役割－。中伊豆リハセンター研修会，2020年1月17日，中伊豆リハセンター
- 4) 植田拓也，東京都介護予防推進支援センターについて。第1回多摩市近トレリハビリ職勉強会，2020年1月17日，多摩市役所

- 5) 植田拓也, 北多摩北部勉強会 2019年9月4日
- 6) 植田拓也, 地域包括ケアについて. 東京都理学療法士協会地域ケア会議推進リーダー導入研修, 2019年11月24日, 大田区消費者生活センター
- 7) 植田拓也, 東京都介護予防推進支援センター成果報告(事業評価・効果検証). 第2回介護予防推進会議, 2019年12月10日, エステック情報ビル
- 8) 植田拓也, 自分で支える、自分が支える～フレイル予防で楽々生活～. 三鷹市みたか健康づくりセミナー, 2019年11月12日, 井の頭コミュニティセンター
- 9) 植田拓也, 自分で支える、自分が支える～フレイル予防で楽々生活～. 三鷹市みたか健康づくりセミナー, 2019年11月6日, 新川中原コミュニティセンター
- 10) 植田拓也, 他.自立について考える. 平成30年度自立支援・介護予防に向けた地域ケア個別会議実践者養成研修. 2019年11月3日
- 11) 植田拓也, 他.自立について考える. 平成30年度自立支援・介護予防に向けた地域ケア個別会議実践者養成研修. 2019年10月30日
- 12) 植田拓也, 他.自立について考える. 平成30年度自立支援・介護予防に向けた地域ケア個別会議実践者養成研修. 2019年10月6日
- 13) 植田拓也, 健康寿命を延ばすために～今から始める介護予防～. 東京都立中央図書館 健康・医療情報講演会. 2019年10月5日, 東京都立中央図書館
- 14) 植田拓也, 町トレを継続支援していく上での課題を考える. 町田市地域介護予防推進員研修, 2019年9月24日, 町田市役所
- 15) 植田拓也, 体力測定結果から考えるサービスの選択,荒川区総合事業サービス関係者研修会, 2019年9月17日, あらかわエコセンター
- 16) 植田拓也. 健康で長生きするための秘訣～キーワードは地域でつくる健康長寿～. 品川区シルバー成年式, 2019年9月7日, きゅりあん大ホール.
- 17) 植田拓也, 他.自立について考える. 平成30年度自立支援・介護予防に向けた地域ケア個別会議実践者養成研修. 2019年9月7日
- 18) 植田拓也, 他.自立について考える. 平成30年度自立支援・介護予防に向けた地域ケア個別会議実践者養成研修. 2019年8月25日
- 19) 植田拓也, サルコペニアとフレイル～加齢によって生じる骨格筋量と骨格筋力の低下に伴う身体機能や認知機能に対する対応～. 港区ケアマネージャー研修, 2019年8月20日, 介護予防総合センターらくっちゃ
- 20) 植田拓也, 地域包括ケアについて. 東京都理学療法士協会地域ケア会議推進リーダー導入研修, 令和元年7月21日, TKP新宿カンファレンスセンター
- 21) 植田拓也, 自立支援を理解するー介護予防が目指すものー. 第1回東村山市介護サービス事業者等ネットワーク研修会, 2019年7月25日, 東村山市中央公民館
- 22) 植田拓也, 自分で支える、自分が支える～フレイル予防で楽々生活～. 三鷹市みたか健康づくりセミナー, 2019年7月10日, 牟礼コミュニティセンター

- 23) 植田拓也, 自分で支える、自分が支える～フレイル予防で楽々生活～. 三鷹市みたか健康づくりセミナー, 2019年6月24日, 井口コミュニティセンター
- 24) 植田拓也, 介護予防に必要な運動学. 多摩市介護予防リーダー養成講座, 2019年6月19日, 多摩市永山公民館
- 25) 植田拓也, 自分で支える、自分が支える～フレイル予防で楽々生活～. 三鷹市みたか健康づくりセミナー, 2019年6月10日, 大沢コミュニティセンター
- 26) 植田拓也, 地域づくりによる介護予防～住民主体の通いの場の役割～. 立川市包括支援センター勉強会, 2019年5月31日, 立川市役所
- 27) 植田拓也, 自分で支える、自分が支える～フレイル予防で楽々生活～. 三鷹市みたか健康づくりセミナー, 2019年5月30日, 三鷹駅前コミュニティセンター
- 28) 植田拓也, 2019年度における東京都介護予防推進支援センターの取り組み. 第1回介護予防推進会議, 2019年5月27日, エステック情報ビル
- 29) 植田拓也, 2019年度における東京都介護予防推進支援センターの取り組み. 第1回リハ連絡会事前セミナー, 2019年5月18日, エステック情報ビル
- 30) 植田拓也, 2019年度における東京都介護予防推進支援センターの取り組み. 第1回地域づくりリハビリテーション専門職連絡会, 2019年5月17日,
- 31) 植田拓也, 自分で支える、自分が支える～フレイル予防で楽々生活～. 三鷹市みたか健康づくりセミナー, 2019年5月15日, 連雀コミュニティセンター
- 32) 植田拓也, 2019年度における東京都介護予防推進支援センターの取り組み. 第1回地域づくりによる介護予防推進員連絡会, 2019年5月14日
- 33) 植田拓也, 地域づくりによる介護予防～住民主体の通いの場の役割～. 立川市包括支援センター勉強会, 2019年4月24日, 立川市役所

●委員等

- 1) 平成31年度東京都自立支援・介護予防に向けた地域ケア会議実践者養成研修事業研修カリキュラム検討委員会委員 (2018年4月～)
- 2) 平成31年度東京都「自立支援・介護予防に向けた地域ケア会議体制構築支援モデル事業」実践会議委員 (2018年4月～)

1. 研究課題

- (1) 特別養護老人ホームに勤務する機能訓練指導員の取り組みと役割、施設における方法について
- (2) 特別養護老人ホームの介護職員の腰痛対策として、福祉機器である介護リフトの導入と活用状況について

2. 研究活動の概要

(1) 特別養護老人ホームに勤務する機能訓練指導員の取り組みと役割、施設における方法について

修士以来研究を続けている重度化が進む特別養護老人ホームの入所者に対して機能訓練指導員がどのような取り組みや考えをもっているか、さらに多職種で進めているかを機能訓練指導員にたいして質的調査を行い分析した。現在、分析結果に基づき投稿原稿を作成中である。さらにこの観点から多職種や役職者に関する研究をする必要があり、そちらについての研究を検討している。

(2) 特別養護老人ホームの介護職員の腰痛対策として、福祉機器である介護リフトの導入と活用状況について

介護労働者の腰痛は、本人の影響のみならず、社会で克服すべき問題となっている。その対策の観点から、福祉用具の導入状況に加え、活用状況を含めた実態とその背景を把握すべく多施設を対象とした介護リフトに対するアンケート調査を実施した。学会発表した内容を深めるために追加調査を行い、論文化を試みているところである。その他介護ロボットの活用などにも関心を持っており情報収集中である。

3. 研究業績

【その他の研究活動】

- 1) 東京都社会福祉協議会東京都高齢者福祉施設協議会
職員研修委員会機能訓練指導員研修委員会代表幹事（9年目継続）として研修会企画・運営

1. 研究課題

- (1) 高齢外来患者の低栄養に関する調査・研究
- (2) 産業保健における高年齢者就労支援

2. 研究活動の概要

(1) 高齢外来患者の低栄養に関する調査・研究

高齢期における健康管理に低栄養の予防は必須である。外来の検査結果である血清アルブミンを中心に評価し、栄養指導を強化する。

(2) 産業保健における高年齢者就労支援

産業保健の現場において、高齢労働者における健康課題となる疾病の増加、高齢者に生じる機能低下、高齢者の直面する心理社会的問題があり、その実態と支援方法について情報収集する。

3. 研究業績

【研究活動】

1) 高齢外来患者の低栄養に関する調査・研究

- ・後期高齢者の食習慣の情報収集
- ・脂質異常症治療中の減量に伴う血清アルブミン値の変化
- ・リーフレット「さあにぎやかにいただく」 配布説明。

出典：健康長寿新ガイドライン「食生活の新しい目安」：東京都長寿医療センター

2) 産業保健における高年齢者就労支援

- ・高年齢者の安全「現場での事故」情報収集
- ・企業内外広報誌コラム執筆

「食と健康」 食コンデショニング 2019.08

「体内時計」 社会的時差ぼけ 2019.12

- ・セミナー講師 テーマ「5S活動と栄養の関連性」 2019.10

1. 研究課題

公衆栄養学授業の論文講読演習において学生が選択した傾向について
－高齢者の食生活に注目して－

2. 研究活動の概要

公衆栄養学演習授業において、学生が興味を持った既存論文を1人1編選択し、論文の要約を行う演習を実施した。学生がどのような論文に興味を持ち選択したかを調べることで、今後の管理栄養士の教育の指導手法や論文講読の環境整備の検討を行い効果的な授業の方策を探ることを目的に実施した。

方法：令和元年度の管理栄養士科3年生の合計42名を対象とした。

論文の検索は、図書室やウェブサイトなどで検索・調査し、学生が興味のある論文（基本的に原著又は報文）を選択させた。選択した論文を「研究の背景」「先行研究」「目的と意義」「研究方法」「結果」「考察」とまとめ、論文に対する学生自身の意見や感想を添えて発表した。

結果：学生が選んだ論文の掲載雑誌の67%は「栄養学雑誌」であったが、日本食品科学工学会誌が24%で、日本調理科学会誌が7%、であった。選択した論文のうち高齢者に注目した学生は2名（4.8%）であった。

～高齢者の食生活に注目した論文のテーマ～

○寒天ゲルの咀嚼回数と食片サイズの関係：日本食品科学工学誌Vol.60, No.10, p 554～562（2013）

○摂食嚥下障害者の在宅移行時における管理栄養士又は栄養士による食事指導に関する調査：栄養学雑誌Vol.74, No.1, p 4～12（2016）

3. 研究業績

【その他の研究活動】

1) 第10回楽しさアップ！おいしさアップ食育フェア（相模原市主催）

相模原市食育推進計画に基づき実施したイベントに相模原市栄養士会役員として協力

日程：令和2年2月15日（土）

場所：アリオ橋本1階 アクアガーデン

- 内容：テーマ「あなたの塩分の感じ方どれくらい」、塩分濃度の簡易測定、栄養相談
- 2) 第16回県央在宅医療・栄養セミナー参加
- 日程：令和元年9月26日（木）
- 場所：小田急センチュリー相模大野 8F 「フェニックスⅢ」
- 内容：テーマ「経腸栄養剤の最近の話題」「相模原地域の栄養連携を目指して～相模原北部栄養地域連携の会の取り組み」「有機的なNST活動の展開」
- 3) 第22回 さがみ居宅医療・介護研究会参加
- 日程：令和2年1月29日（木）
- 場所：相模原市南メディカルセンター 大会議室
- 内容：テーマ「高齢者の便秘対策」－画像から見た便秘のメカニズム－

1. 研究課題

- (1) 笑いヨガにおける高齢者の心理的効果および介護予防プログラムの検討
- (2) 高齢者の生涯学習等に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 笑いヨガにおける高齢者の心理的効果および介護予防プログラムの検討

厚生労働省の「これからの介護予防の考え方」では、「住民自身が運営する体操の集いなどの活動を地域に展開し、人と人とのつながりを通じて参加者や通いの場が継続的に拡大していくような地域づくりを推進する」としている。高齢者にとって、笑いヨガは身体的、心理的の健康に効果をもたらすことが報告されている。高齢者にとって楽しく、心身共に負担のない介護予防プログラムの検討が必要である。さらに、高齢者が要介護状態に陥ることなく、健康で生き生きとした生活を送れるような検討も必要である。

本研究では、笑いヨガとボディワークヨガを実施し、高齢者の心理的効果を明らかにする。さらに、高齢者が要介護状態に陥ることなく、健康で生き生きとした生活を送れるように支援できる、介護プログラムの検討を行うことを目指している。

(2) 高齢者の生涯学習等に関する研究

昨年度に引き続き自由時間研究会でスーパーボールとラクロスボールを使用したヨガ実践について発表を行う。また、高齢者の地域活動についての情報を収集する。

3. 研究業績

【その他の研究活動】

- 1) 千葉県生涯大学「笑ヨガ」「基礎心理学」「ストレスマネジメント」講義と実践（連続講座）
- 2) 相模原市高齢者福祉課「あじさい大学」卒業生の自主グループ「ボディワークヨガ」を実践
- 3) 特定非営利活動法人 わくわくガイア「健康の予防」講義と実践
- 4) 世田谷区民会「ストレスケア」講義と実践
- 5) 大田区地域活動グループ「ボディワークヨガ」講義と実践（連続講座）
- 6) 地域社会活動自由時間研究会 「生涯者大学での実践報告」

1. 研究課題

高齢期の健康関連の逆境に対するレジリエンス尺度の開発および関連要因

- (1) 予測的妥当性の指標と強化要因-文献検討-
- (2) 内容的妥当性の検討—COSMINチェックリストの使用—
- (3) 量的予備研究

2. 研究活動の概要

(1) 予測的妥当性の指標と強化要因

妥当性検証のための量的研究に先立ち、レジリエンスの関連要因、さらにアウトカムへの影響に関する仮説を検討した。仮説構築の段階で発表するのは、広範な学問分野の視点からの批判を受けることで、より理論的に整合的な仮説を構築することを目指すためである。レジリエンスの5つの構成概念に関連する要因と、レジリエンスの影響を受けるアウトカムについて、文献検討により重要な要因を抽出した。データには、国内・国外のレジリエンスに関する既存文献及び質的研究の結果、高齢期の健康についてレジリエンスを含み体系的に検討された研究あるいは文献（Staudinger et al.1993, Rowe et al.1997, WHO2015）の3種類を使用した。関連する要因には、発達の・生理的・認知という3種類の「予備力」、心理的なレジリエンスと心身・生物学的側面からのレジリエンスを結合する「生物学的視点」、 「ライフコース」の3つ、レジリエンスの影響を受けるアウトカムには心身面・個人の活動・社会への参加という生活全般を含む「生活機能」を得た。

(2) 内容的妥当性の検討—COSMIN チェックリストの使用—

内容的妥当性の検討の方法や内容が適切なものであるかについて、健康関連の患者報告式アウトカム尺度開発のチェックリストCOSMINを使用して確認した。COSMINにはオリジナル版（2012）と追加版の研究計画チェックリスト（2019）がある。内容的妥当性についてオリジナル版（2012）では、1.構成概念と項目の関連、2.項目と研究対象者の関連、3.項目と研究目的の関連、4.項目の構成概念に対する包括性、5.その他不備な点、研究計画チェックリスト（2019）では、1.患者の視点による妥当性・包括性・わかりやすさの検討、2.専門家の視点による妥当性と包括性の検討、3.専門家の学問分野、4.患者や専門家の人数、5.司会者の熟練度、6.グループインタビューの話題、7.グループ検討の記録、8.分析方法、9.分析者の人数について適切性をチェック

するという内容である。本研究において地域高齢者と地域包括支援センターの専門家の協力によりすでに行った内容的妥当性の検討は、2012年版COSMINチェックリストではすべてのチェックをクリアしたが、FGI実施後に公表された2019年版ではFGI記録の分析者数（2名）と量的分析実施の要件に欠けた。不足な点は予備調査の分析後に修正する予定である。

(3) 量的予備研究

尺度開発の量的研究の予備研究を行った。調査対象者は本調査においても対象者とするシルバー人材センター登録者36名（女性が44%、年齢範囲70歳～80歳、平均年齢74.9歳）、調査方法は4人グループの調査形式、調査時間は2時間（1.5時間は調査票への自記式回答、0.5時間はタブレット版認知機能検査などの個別調査）だった。2020年2月に東京都内のシルバー人材センター会議室において行い、現在分析中である。

3. 研究業績

【論文】

- 1) 小林由美子, 杉澤秀博, 長田久雄, 刈谷亮太, 殿原慶三, 石原房子: 地域在住高齢者の健康関連の逆境に対するレジリエンスの分析枠組みに関する質的検討. 老年学雑誌10 (印刷中).

【学会発表】

- 1) 小林由美子, 杉澤秀博, 長田久雄, 刈谷亮太, 殿原慶三, 石原房子: 地域在住高齢者の健康関連の逆境に対するレジリエンスの分析枠組みに関する質的検討. 第61回日本老年社会学会ポスター発表.
- 2) 小林由美子, 杉澤秀博, 長田久雄, 刈谷亮太, 殿原慶三, 石原房子: 高齢期の健康関連の逆境に対するレジリエンスについての文献検討－予測的妥当性の指標と強化要因への着目－, 第14回日本応用老年学会口頭発表.

1. 研究課題

高齢期の就業機会拡大に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 中高年の開業における事業継続と社会的支援の関連

欧米では起業家及び起業活動に関する研究が盛んに行われており、その対象は中高齢期の起業家にも広がりつつある。一方、日本においては開業数などの定量的な実態把握の調査は行われているものの、中高年の人たちの開業の成功要因に関する実証研究はほとんどない。本研究では、中高年男性が開業した際の成功に関連する要因を、特に社会的支援に着目し明らかにすることを目的とした。社会的支援は公的支援と個人的つながりによる支援に大きく2区分した。その他の要因には職務経験、開業時年齢、開業した職種、学歴、開業資金などを位置付けた。開業の成功の可否は、予想月商達成の可否、開業後の収入の増減で測定した。対象は、開業時年齢が40～64歳、2005年以降に初めての起業・開業を実現した男性であった。この条件に合う対象者を、ウェブ調査会社のパネルから抽出した。分析の結果、予想月商の達成に経営経験が有意に影響すること、開業後の収入については、有意に増加させる要因は営業経験、有意に減少させる要因は開業時年齢であった。社会的支援は、予想月商達成、開業後の収入の増減のいずれに対しても有意な影響はなかった。社会的支援があまり効果でなかった理由は今後、質的研究によって解明することを予定している。本研究は、2019年度「学内学術研究振興費」（研究代表者：杉澤秀博教授、共同研究者：中谷陽明教授、島影真奈美）の助成を受けて行った。

(2) 中高年男性の自営業への移行における社会関係の影響

本研究は、中高年男性における自営業の就業選択を予測する要因を社会関係に着目して明らかにすることを目的とした。分析に用いたデータは、東京都老人総合研究所と桜美林大学加齢・発達研究所によって実施されたパネル調査「中年期の生活の送り方に関する全国調査（JHRS）」から得た。自営業への移行は全4回の調査期間のうち、第1波から第2波間、第2波から第3波間、第3波から第4波間で移行したか否かで測定した。社会的支援は、悩み事を相談できるか否かという情緒的な側面から関係の種類別（家族や仕事相手、友人・近隣など）に測定した。加えて、年齢や学歴、本人の職業の影響についても分析した。分析の結果、仕事上の知人数が多い人ほど自営業に移行する割合が高いことが分かった。この研究結果は学会で発表するとともに、論文として投稿を予定している。

(3) ホテル業界における高齢従業員雇用の促進要因

本研究では、ホテル業界における高齢従業員雇用の促進要因を量的・質的調査に基づき解明することを目的とした。

量的調査では、観光庁に「ホテル」として登録されている全927施設を対象に郵送調査を実施した。雇用の進展は2種類の指標（①旧来の指標である高齢従業員比率、②仕事の種類の広がりや評価する在籍と増員意向の部門数）によって評価し、雇用の促進要因は職場の制度、人事責任者の意識、企業属性の3側面から検討した。分析の結果、高齢従業員比率と在籍あるいは増員意向のある部門数に関連する要因はそれぞれ異なることが明らかになった。量的調査に基づく研究結果は「老年学雑誌」第10号に掲載予定である。

質的調査では、高齢従業員の仕事の種類が多いホテルの人事責任者を対象とする面接調査を実施した。分析の結果、人事責任者には高齢者の能力を活用したい意向があったが、実際に高齢者を配置できる仕事の種類は限られていることが明らかになった。質的調査に基づく研究結果については「応用老年学」に投稿中である。

(4) ホテルの人事責任者が高齢従業員に求める能力

本研究では、(3)で実施した郵送調査の自由回答分析に基づき、ホテルの人事責任者が高齢従業員に求める能力やスキルを解明することを目的とした。KH Coderによる計量テキスト分析を行った結果、「特定分野のスペシャリスト」「意欲と限界」「調理・接客の経験者」「若年層との協働」「PC操作ができる」「シフト勤務が可能」「明朗快活な体力自慢」の7つのクラスターが抽出された。人事責任者が高齢従業員に求める「特定分野のスペシャリスト」「PC操作ができる」といった狭義の能力・スキルにとどまらず、「明朗快活な体力自慢」のように人柄や健康面を含め、包括的にとらえられていることが示唆された。この研究結果は学会に発表するとともに、論文として投稿するための作業を進めている。

(3)と(4)の研究は、公益財団法人江頭ホスピタリティ事業振興財団平成29年度研究助成金「ホテル・旅館業界における高齢者雇用の促進要因に関する研究」（研究代表者：島影真奈美）の助成を受けて行った。

3. 研究業績

【著書】単著書

- 1) 島影真奈美, 『子育てとばして介護かよ』 KADOKAWA, 2019年

【論文】査読付き

- 1) 島影真奈美, 杉澤秀博. 2019. ホテル業界における高齢従業員活用とその関連要因. 老年学雑誌 (掲載確定)

【学会発表】

- 1) 島影真奈美, 杉澤秀博. ホテル業界における高齢従業員の採用要因：人事責任者が求める能力・スキルに着目して. 第61回老年社会科学会. 仙台. 2019.
- 2) 島影真奈美, 杉澤秀博. 中高年男性の自営業への移行における社会関係の影響. 第14回老年社会科学会. 京都. 2019.

【その他】

- 1) 連載「定年後 難民にならない方法」島影真奈美, 「夕刊フジ」(産経新聞社). 2017年10月～現在
- 2) 連載「別居嫁介護日誌」島影真奈美, 「毎日が発見ネット」(KADOKAWA). 2019年2月～9月
- 3) 連載「もめない介護」島影真奈美, 「なかまある」(朝日新聞). 2019年4月～現在

【科研費などの助成金】

- 1) 2019年度学内学術研究振興費「高齢者の起業・就業促進に関連する要因」(分担研究者)

1. 研究課題

- (1) 高齢者の入浴事故防止
- (2) 事故になりにくい入浴方法

2. 研究活動の概要

日本温泉気候物理医学会雑誌（2020年5月発行予定）への論文Accept決定
J-STAGEにて早期公開

原著論文名：地域在住高齢者の入浴時の循環動態反応

—浸漬方法・温度の違いから—（鈴木知明、渡辺修一郎）

The Circulatory Dynamics Reactions of Elderly Community Residents During Bathing :
Differences Resulting from Immersion Methods and Temperatures (Tomoaki SUZUKI ,
Shuichiro WATANABE)

3. 研究業績

【著書】

- 1) 「日本で初めて!! 授業で使える 小学生向け お風呂の教科書」
鈴木知明（高齢者入浴アドバイザー協会）/株式会社ケイアール/300円+税

【論文】

- 1) 上記記載の通り

【その他の研究活動】

- 1) 中国（上海・安徽省・四川省）において介護福祉にかかわる視察
- 2) 和歌山県 花山温泉 薬師の湯で講演（高齢者入浴セミナー）
- 3) 「元気にキレイに」（朝日新聞）にて入浴事故防止のコメント
- 4) 「住まいの処方箋」（夕刊フジ連載）にて高齢者入浴に関するコメント

1. 研究課題

介護家族への支援についての研究

2. 研究活動の概要

1) 別居子による別居介護についての実態調査

「遠距離介護」に代表されるように、別居子が通いながら介護を行う、別居介護という介護形態が近年増え続けている。マスメディアにも取りざたされ、社会的な関心も高まり、今後も別居介護を選択する家族が増えるであろうと予測されているが、学術的な研究蓄積がなされていないのが現状である。そこで昨年度同様、別居介護の研究を蓄積すべく、同居介護と別居介護の背景要因を比較し別居介護特有の以下の特徴を明らかにした。①別居介護は状況に応じてとられた選択肢のひとつであること。②別居介護の選択・継続が介護離職抑制に何らかの影響を与えている可能性があること。③別居介護の介護負担は同居介護の場合と質的に大きく異なること。これらの結果から、次なる研究課題を設定し、次年度も引き続き調査を行う予定である。

2) 認知症の家族介護者支援ガイドブックの編集

平成30年度老人保健健康増進等事業「認知症の人の家族等介護者への効果的な支援のあり方に関する研究事業」（認知症介護研究・研修仙台センター）の調査に基づいたガイドブックの編集業務を行った。

認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）の7つの柱の一つである、「4. 認知症の人の介護者への支援」は、認知症の人の介護者への支援を行うことが、認知症の人の生活の質の改善にもつながるとの観点に基づいている。全体としての家族を前提に置くと、認知症の人を介護する家族への支援と、認知症の人本人への支援は、本来、不可分のものであるが、どうしても認知症の人本人への支援・ケアが注目され、家族介護者への支援がそこから分離されてしまう傾向があることが否めない。家族介護者を、介護を担う社会資源の一部としてだけでなく、自らも支援を必要とする存在であることとらえることは重要な視点であるといえよう。

本ガイドブックは、新オレンジプランに基づき、認知症の人の家族等介護者1人ひとりに、必要などきにいつでも必要な支援が行き届くための、専門職による家族支援の指針となる手引書としてまとめたものである。ガイドブック上では、「Q2-10 通い（別居）介護者の支援はどのように行うか」を執筆し、上記の視点に基づき、全体的な編集作業に参加した。

3. 研究業績

【学会発表】

- 1) 関野明子・矢吹知之・長田久雄他：「認知症かもしれない」と家族が違和感を覚えた事象の特徴－認知症高齢者を介護する家族介護者への調査から－, 2019.5.25, 第20回日本認知症ケア学会大会, 京都
- 2) 関野明子・矢吹知之・長田久雄他： 認知症高齢者の家族介護者が行う「演技」とは－演技に関する自由記述データから－, 2019.6.7, 日本老年社会科学会第61回大会, 宮城

【論文】

- 1) 長田久雄・関野明子・森下久美、認知症の非薬物療法のエビデンス 特集：認知症の非薬物療法のエビデンスと効果的な実践のあり方. 日本認知症ケア学会誌、第18巻第2号、425-430. 2019.7.
- 2) 関野明子・長田久雄：家族介護者アセスメントに求められる視点の検討－二重ABC-Xモデルを援用した事例分析から－, 老年学雑誌第10号, 127-142, 2020.3

1. 研究課題

高齢者における学習ニーズの自覚から学習実施に至る過程に関する研究

2. 研究活動の概要

高齢者の学習開始までの過程に着目し、「主観的な学習ニーズがない」から「主観的なニーズの形成」さらに「学習活動実施」までの各段階に移行する要因を分析する。

3. 研究業績

【その他の研究活動】

- 1) 高齢者における主観的な学習ニーズ及び学習経験に関する評価指標の妥当性と信頼性調査を行った。その結果について、学会誌に投稿準備している。
- 2) 高齢者における学習ニーズの自覚から学習実施に至る過程に関する高齢住民調査を行った。その結果について、論文を作成している。

1. 研究課題

- (1) 認知症当事者の声や語りに基づいた当事者主体の支援の在り方を見出す。認知症当事者が認知症と共に生きていくことへの思いや、そこから見えてきた彼等の現実に向かう姿勢を原点に、暮らしやすい地域をどう創っていくか。同時に、認知症当事者から見た地域包括ケアシステムの在り方を探る。
- (2) 100歳人生を豊かに生き抜くための実学として、老年学をいかに地域に浸透させていくか、地域住民と共に多角的かつ魅力的な地域活動を実践しながら模索する。

2. 研究活動の概要

- (1) 支援する側の立場からではなく、認知症当事者に寄り添う立場から認知症当事者の声を聴くことから、住み慣れた街で自分らしい暮らしを続けていくための支援の在り方を導き出すための研究を進めている。調査対象者を得るためにも各地の家族会や当事者の会、認知症サポートセンターなどとの連携やボランティア活動も欠かせない。これまで北海道、東北、関東、東海、関西の各地域で、在宅で生活している若年性認知症当事者にインタビューを重ね、「異変の気づきから認知症とともに生きることを見出すまでの過程」を分析テーマに質的研究を重ねてきた。1 昨年より自分の住んでいる地元に着目することで、日々の生活の中で発せられる当事者の語りに注目し、そこにどんな思いが宿っているかを家族を交えて探る手法など、在宅で暮らす当事者のためにより説得力のある質的研究への工夫を重ねていきたい。
- (2) 高齢者となってからの地域との繋がり方、健康長寿のための心身との向き合い方、定年退職後の経済問題、終活のアイデア、老いの住まい、看取り・看取られ方、死をどう選択するか等、地域在住の高齢者にとって切実な諸問題を、地域活動の中で連続講座等で展開しながら、老年学の啓発と研究活動を両立させる。昨年より地域の民生委員に任命され、この研究テーマがより切実なものとなった。自分が住む地域の高齢化が30パーセントを軽く超えるという厳然たる事実の中で、老年学の実学としての力を試す意味でも、様々な角度から成果を上げる実践研究にせねばならない。

3. 研究業績

【その他の研究活動】

- 1) 地方独立行政法人 東京都健康長寿医療センター「社会参加と地域保健研究チーム」が継続的に行っている「草津町にっこり検診」実施につき、群馬県吾妻郡草津町大字草津「草津町総合保健福祉センター」での地域高齢者住民の生活に関わる聞き取り調査（生活問診）に調査員として参加。
- 2) 人生を書くと60歳からの人生が面白く変化する
「自分を見つめ直す文章講座」一回想心理学を活用して一地域のシニアを対象に開講
- 3) 高齢者専用賃貸住宅における「みんなの保健室」相談員。
- 4) 地域ケアプラザと連携して地域の認知症高齢者に対する支援活動に従事。カフェ活動、リハビリテーション、地域ケア会議等への参加並びに介護家族の相談支援にもあたる。

1. 研究課題

介護予防・地域支えあい事業アクティビティ・ケアプログラムに関する研究

2. 研究活動の概要

- (1) 昨年度のフィールドワークを継続して実施中。神奈川県A市にあるBグループホームにてアクティビティ・プログラムの企画と実施に携わる。
- (2) 東京都B市にある総合福祉センターを活動場所として展開されている高齢者の自主運営による英会話グループの講師としてプログラムに参加し、高齢者による自主運営プログラムの実施状況を観察しその展望を探る。

1. 研究課題

女性定年退職者の生活と考え方

2. 研究活動の概要

情報収集

女性定年退職者は総合職世代の引退などでここ数年増えてきており、調査報告、文献など情報もふえている。

(1) 所属関連団体からの情報収集

老年社会科学会、日本応用老年学会、高齢社会をよくする女性の会、シニア社会学会、シニアわーくすRyoma 21

(2) 既存関連調査（官庁、民間）の情報収集

3. 研究業績

【講義】

- 1) 順天堂大学 国際教養学科 教養課程にて
死生学を中心にした老年学の講義を行った（令和1年年7月11日）

1. 研究課題

社会的孤立者に対する「聞き書き自分史」の効果に関する研究

2. 研究活動の概要

社会的孤立の介入方法として「聞き書き自分史」に着目し、その心理的効果について明らかにする調査を行った。

八王子市清川町に居住している65歳以上の全住民を対象とした調査の回答者の中から、以下の5条件に合致し、かつ介入に承諾した4名を介入対象とした。5条件とは、①社会的孤立の状態にある（ルーベンの社会的ネットワーク尺度が12点未満）、②介護保険認定を受けていない、③自力での歩行が可能、④認知症を発症していない（介護予防認知症チェックリストのいずれにも該当しない）、⑤うつではない（GDS10点以下）である。

介入方法は、対象者宅など聞き取りを行うことができる場において、研修を受けた学生とともに週に1回1時間程度、延べ6回行った。回数別内訳は、「聞き書き自分史」作成の聞き取りを計4回行い、加えて地域の交流拠点への参加の機会を1回、6回目に自分史の贈呈を行った。

心理的効果の評価については、自尊感情尺度（RSES：星野訳4件法）と生活満足度尺度（LSI-K）を用いて介入前後の値を比較した。その結果、自尊感情尺度（RSES）については、5%の有意水準で有意差がみられ、平均2.38ポイントの増加がみられた。生活満足度については、有意な差は見られなかった。

本研究の介入により、自尊感情に対して有意な効果がみられたが、その効果は一時的なものか、あるいは持続するものなのか、さらには社会的孤立の解消につながるのか、今後の残された課題である。また、調査に協力いただいた対象者が少なかったことも課題である。調査に協力いただくことは容易ではなく、拒否される方も少なくなかった。今後は、どのようにして受け入れていただけるか、さらに深く掘り下げていきたい。

1. 研究課題

地域における認知症予防に関する研究：

- ①認知症の知識を普及させる活動の効果の研究
- ②認知症の人に回想法や傾聴などの非薬物療法を提供する効果についての研究

2. 研究活動の概要

①の「認知症の知識を普及させる活動の効果の研究」については昨年度の業績書で述べたように、これまで15年に亘って自宅を拠点として、近くの町内会、地域包括支援センターなどの要請を受けて、認知症に関する講演会を行ってきた中での大きな問題は、こうした講演に参加する人たちが住民の中では認知症のリスクが小さいと考えられる人たちであるということである。つまり講演会などの活動では、一番認知症のリスクが大きいと考えられる人たちには、認知症の知識が届いていないのではないか、という問題である。

この問題をどのようにして解決すればよいか、という課題を背負ったのが2019元年度の活動である。

その解決方法として、まず私が居住している町内会の各戸に、「健康長寿通信」なる文書を毎月届けることとした。これを実施するには町内会の会長以下役員全員が参加する定例会で、このような文書を配布する了解をとり、かつその配布を他の町内会の配布資料と同時に、班長にやっていただく了解をとった。

こうして、認知症の予防知識が、講演会などに参加することのない人々にも届く体制を作った。

なおこのような体制を作る中で出された町内会役員の意見を入れて、この文書の内容を単に認知症の予防にとどめず、健康長寿全般に資する内容とすることとし、タイトルを「健康長寿通信」とした。

この「健康長寿通信」では以下のようなタイトルで健康長寿に関連する知識を伝えた。

- あなたの「BMI」いくつですか
- 在宅医療
- 運動不足ですか？ それなら家の中で「ちょこまか動き」を
- 認知症になった認知症の権威者 長谷川和夫先生
- 平均寿命が延びている陰で不健康な期間も延びている
- 日本食は理想の食事？ 私たちの食事は戦後大きく進化。しかし今大きな問題も

1. 研究課題

- (1) グループワークにおける認知共有とチームワーク能力の関連について
- (2) 病気予防としてのヘルスコーチングの実施

2. 研究活動の概要

(1) グループワークにおける認知共有とチームワーク能力の関連について

本研究では、地図作成ワークを通して認知共有を体験することで、個人のチームワーク能力を介して集団の課題達成を高めることについて検討した。結果として、ワークを通して認知共有が高まったものは、チームワーク能力の状況把握能力が有意に上昇し、それに伴って集団の課題達成の向上につながることを示された。今後は、チーム・ダイアログの測定などによって、コミュニケーションの質及び量についても検討する必要がある。

(2) 病気予防としてのヘルスコーチングの実施

近年、医療・健康領域におけるヘルスコーチングが広まりつつある。海外の研究について調べると、糖尿病、COPDなどの患者に対する健康教育としてヘルスコーチングが用いられる研究が多い。日本における実証的な研究報告はいまだされていない。海外の研究のレビューとともに、日本におけるヘルスコーチングの実態について、調査を継続していく。

3. 研究業績

【学会発表】

- 1) 永峰大輝・石川利江 (2019) . グループワークにおける認知共有とチームワーク能力の関連について. 日本健康心理学会第32回大会.

1. 研究課題

- (1) デスカフェが人生観や死生観にどう関連するのか
- (2) 市井の老年学の普及・啓発と地域高齢者の老化不安への影響

2. 研究活動の概要

(1) デスカフェが人生観や死生観にどう関連するのか

デスカフェはさまざまな地域でさまざまな人々が少人数で集まり、「死」をテーマに語り合うカフェである。ACP、人生会議、看取りといった言葉が浸透するに伴い、地道ながらより多様な場所と人々で行われるようになってきている。そこで実際に、デスカフェに参加及び開催協力等の関わりを続けながら、草の根運動のような静かな広がりを見せるデスカフェの自発的コミュニケーション機能と、参加者それぞれの人生観・死生観への関連を探求する。

(2) 市井の老年学の普及・啓発と地域高齢者の老化不安への影響

老年学は高齢社会をテーマにする産官学の専門家の間では知られている一方、一般市民（市井の生活者）の中では、まだ知らない人が多い学問である。これからの高齢社会をより健全に、かつ、維持し続けるには、公助、共助だけではなく、互助、自助が強く求められている今、生活者一人ひとりが老年学を知り、高齢者はただ支えられるだけの存在ではなく、できることを提供し合いながら、地域の力になる役割を自覚することが不可欠になっている。そのためにはまず、より身近に老年学を学べる「場」を提供し、高齢者自身の老化不安を軽減すること。そのような「場」を繰り返していくことで、高齢者自身の意識の変化を探っている。

3. 研究業績

【論文】

- 1) 萩原眞由美, 柴田博, 芳賀博, 藤井圭, 長田久雄. 自発的な「死」の語り合いがもつ意味 – デスカフェ参加者の人生観と死生観を通して –. 日本応用老年学, 13 (1) :54-65, 2019

【学会発表】

- 1) 萩原真由美, 藤井圭, 長田久雄: 中高年者のデスクフェ参加動機. 第14回日本老年学会大会, 京都, 2019年10月20日.

【その他の研究活動】

- 1) 発表: 老年学をビジネスに変える - 2つの老年学 -. 桜美林大学老年学研究科同窓会記念行事シンポジウム. 2019年4月13日.
- 2) 連続講座: 社会福祉法人愛隣会ここからカフェ公開講座. みんなで学ぶ老年学
第1回 老年学とは. 2019年7月24日.
第2回 これからの高齢者の健康とは. 2019年9月25日.
第3回 正しく知ろう認知症. 2019年11月20日.
第4回 歳とるほどに魅力的になる! - 生涯発達の条件とは -. 2020年2月19日.
- 3) 企画運営・話題提供: みんなの老年学研究会, 桜美林大学四谷キャンパス
第13回 ワークショップ: 私たちにとっての老年学とは. 2019年5月28日.
第14回 主観的健康感と主観的幸福感の再確認. 2019年7月20日.
第15回 生き方と老年学. 2019年9月19日.
第16回 シニアの防災と老年学的考察. 2019年12月1日.
- 4) 開催協力・講座講師: デスカフェ&死生観カフェ, マザーリーフ五反田
・ 認知症を学んで、死を語ろう. 2019年4月20日.
・ 自分ごとのACPを再認識し、死を語ろう. 2019年6月1日.
・ 老年学と死生学で考える平穏死. 2019年11月20日.

1. 研究課題

- (1) 独居高齢者の配偶関係からみた類型が高次生活機能および精神的健康状態に及ぼす影響
- (2) 認知症高齢者のQOLと環境との関連

2. 研究活動の概要

(1) 独居高齢者の配偶関係からみた類型と精神的健康状態および社会的役割との関連

首都圏での増加が著しい独居高齢者は、その配偶関係からみた類型が多様化している。配偶者との関係から、別居・離別・死別・未婚に類型化した。類型が健康状態に及ぼす影響を明らかにすることを目的とし、WHO-5-JおよびTMIG-IC社会的役割を用い検討した。

(2) 認知症高齢者のQOLと環境との関連

首都圏のユニット型特別養護老人ホーム（ユニット型特養）に入所している認知症高齢者のQOLと環境との関連について検討した。

3. 研究業績

【論文】

1) 原著論文

「ユニット型特養の施設環境と認知症利用者の生活の質との関連」ブラン野口純代，渡辺修一郎，橋本由美子，長田久雄 応用老年学 2019年8月号 Vol. 13 No.1

【学会発表】

1) 独居高齢者の配偶関係からみた類型と精神的健康状態および社会的役割との関連

橋本由美子，渡辺修一郎，野中久美子，小池高史，長谷部雅美，村山陽，鈴木宏幸，深谷太郎，小林江里香，藤原佳典（第14回日本応用老年学会大会 2019-19-20 抄録集 p.50）

2) Relationship Between Types of Elderly Living Alone and Their Mental Health or Social Role

Yumiko Hashimoto, Shuichiro Watanabe, Kumiko Nonaka, Takashi Koike, Masami Hasebe, You Murayama, Hiroyuki Suzuki, Taro Fukaya, Erika Kobayashi, Yoshinori Fujiwara

(The 11th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress October23-27,2019 PROGRAM BOOK p.96)

1. 研究課題

- (1) 高齢経営者からの事業承継
- (2) 生きがいをデザインする人生設計

2. 研究活動の概要

(1) 高齢経営者からの事業承継

長寿企業における高齢経営者からの事業承継について、どのような3つの資本（経済資本・文化資本・社会関係資本）がどのようなプロセスで後継者に承継されているかについての研究。文献講読をはじめ、100年超の企業の後継者や先代経営者に対して情報交換を行っている。

(2) 生きがいをデザインする人生設計

生きがいを支える5つの健康（身体・心・つながり・お金・仕事）について、先行研究を調べ、それを実現するための生活技術を考察考案している。

3. 研究業績

【論文】

- 1) 「長寿企業の後継者の視点による先代経営者の経営姿勢・生き方の承継プロセス」老年学雑誌 第9号

【その他の研究活動】

- 1) 講義 朝日カルチャセンター中之島教室（2020.1～3月 月1回3回）
「Art Of Living 加齢発達するための生活技術」

1. 研究課題

- (1) 高齢者のQOLと社会貢献の向上に資する公共政策
- (2) 活力ある高齢社会構築に資する公共政策
- (3) 大衆長寿社会における老年学の普及、啓発

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者のQOLと社会貢献向上に関する公共政策

産学公民連携によるフィジビリティ・スタディの推進

(2) 活力ある高齢社会構築に資する公共政策

QOA座標軸検討 (Quality of Aging/健康長寿座標二次元モデル)

「地域公益活動団体 (自治会、NPOなど)」、地方自治体との新・連携の推進

(3) 大衆長寿社会における老年学の普及、啓発

キャンパス・コミュニティ/CCRC構想の研究

高・大連携によるエイジング論共通科目化の研究

集合住宅「二つの古い問題」対策の研究

3. 研究業績

【公共政策プロジェクト】

- 1) 認知症カフェ運営/プログラム・オフィサー (館山市)
- 2) 新たな介護文化創造PT/プログラム・オフィサー (高齢者福祉事業者団体)
- 3) 集合住宅「二つの古い問題」対策プログラム (マンション管理士団体)
- 4) 茅ヶ崎市国民健康保険運営協議会 (委員: 非常勤特別職)

【主な講演、講義】

- 1) 老年学特論 (札幌学院大学大学院地域社会マネジメント研究科)
- 2) 高齢者福祉施設職員研修/公共哲学としての死生観 ほか、多数

1. 研究課題

後期高齢者における椅子立ち上がりテストと生活動作との関係

2. 研究活動の概要

修士論文では、後期高齢者の10秒椅子立ち上がりテストと大腿四頭筋筋力との関係について、椅子立ち上がりテストの計測値と筋力との関連を検討してきたが、生活動作との結びつきについて検討していく必要性を感じており、椅子からの立ち上がりテストを用い、後期高齢者を対象とした調査を継続して行く。

3. 研究業績

【その他の研究活動】

- 1) 千葉県理学療法士会学術局主催研修会運営
- 2) 千葉県理学療法士会地域包括ケアシステム推進リーダー研修会運営協力
- 3) 「専門リハビリテーション研究会誌」編集協力
- 4) 「理学療法の科学と研究」編集協力
- 5) 老人保健施設 おおくすの郷 要介護者への理学療法
- 6) 「理学療法講習会」臨床を豊かにする理学療法研究の基本への協力

1. 研究課題

- (1) シニアマーケット研究
- (2) 高齢者の安全・安心に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) シニアマーケット研究

- ・シニアマーケット関連の調査、設計、実施、報告
- ・高齢者をメインターゲットとする商品・サービスに関する市場調査、及び企画一式（調査設計・実査・分析・報告等）
- ・高齢者の行動調査の設計、実施、分析、等
- ・高齢者施設における実証研究

(2) 高齢者の安全・安心に関する研究

- ・警察政策学会・日本市民安全学会での研究会に参画
- ・隔月で行われる研究会に参加
- ・日本市民安全学会 毎月行われる研究会に参加
- ・市町村・企業・学会等、依頼講演による啓蒙活動等

3. 研究業績

【その他の研究活動】

- 1) 介護ロボットの活用に向けた人材育成に関する調査研究事業専門家委員会委員
(老人保健健康増進等事業(老人保健事業推進費等補助金))
- 2) 東京大学共創センター「リビングラボ研究会」
- 3) 高齢者ドライバー意識調査アドバイザー

4) 講演他

- ①2019年6月28日：立教大学セカンドステージ(立教大学)
「老年学視点からのシニアマーケット分析」
- ②2019年6月29日：日本市民安全学会（日本倶楽部：大手町）
「シンガポールの安心・安全事情、その考察」
- ③2019年7月29日：DNPコミュニケーションデザイン（本社：市ヶ谷）
「超高齢社会のコミュニケーションデザイン」
- ④2019年9月25日：神奈川県警察本部生活安全課；神奈川県防犯指導員連絡協議会
「正常老化と老年学からみた詐欺被害」
- ⑤2019年10月25日：公益法人アジア生命保険振興センター（本社：赤坂）
「what senior marketing from the perspective of gerontology」
（老年学（ジェロントロジー）の観点からみたシニアマーケティングとは）
- ⑥2019年12月7日：関東東芝ITユーザー会（東芝：川崎）
「仕事と介護の両立のために」
～働き方改革の今、働き続けるために知っておくべきこと、考えるべきこと～
- ⑦2020年1月18日：シニアライフコーディネーター養成講座（渋谷）
「ジェロントロジーとはどんな学問？」
- ⑧2019年1月19日：某電気メーカー（神田明神会館）
「シニア5000万人時代・新市場の創造」

5) 執筆他

- ①堀内裕子，（連載）発見「いいもの・いいこと」見つけてきました
TECHNOプラス 福祉介護 日本工業出版社
No.112 4月 「おくりびと」Ⅰ
No.113 5月 「おくりびと」Ⅱ
No.114 6月 「おくりびと」Ⅲ
No.115 7月 「おくりびと」Ⅳ
No.116 8月 「死因「老衰」3位「人口動態統計月報年計」
No.117 9月 「介護に関する映画が続々！」Ⅰ
No.118 10月 「介護に関する映画が続々！」Ⅱ
No.119 11月 「介護に関する映画が続々！」Ⅲ
No.120 12月 「毎年「過去最高」の高齢化率・高齢者人口
No.121 1月 「何歳から高齢者？」Ⅰ
No.122 2月 「何歳から高齢者？」Ⅱ
No.123 3月 「何歳から高齢者？」Ⅲ
- ②週刊朝日，「シニアのお助けグッズ」，2019年7月5日，朝日新聞出版
- ③月刊シルバー人材センター，巻頭「人生100年時代の高齢者<生き方・支え方>P2～5，「シ

ニアの「モラトリアム」に注目、大義名分と素直さで再チャレンジを」, 2019年6月号, 労務行政

④月刊pumpkin (パンプキン) セカンドライフ相談室「定年後の人生を充実させるために」
2019年10月号, 潮出版社

6) その他

①リビング・オブ・ザ・イヤー (高齢者住宅経営者協議会) 2019年審査員

1. 研究課題

ひとり暮らしの高齢者が要介護になっても、住み慣れた地域でできるだけ継続して在宅生活を送るために、地域住民に求められる支援と課題について調べる。

2. 研究活動の概要

老年学雑誌（10号）掲載の論文は、ひとり暮らし要介護高齢者に対する住民による支援の過程について論じています。地域住民が、直接要介護高齢者に関わるには、当事者である高齢者はもちろんですが、遠方に住む家族や支援に関わる専門職の人達から信頼を得ることも支援の過程で明らかになりました。さらに支援提供を可能にする外的・内的資源の存在や高齢者へのほど良い距離感による対応などという促進要因が影響していることがわかりました。

今年度は、ひとり暮らし高齢者が参加する趣味のサークルに参加継続、地域住民による支援としてあげられる市民後見人講座に参加修了しました。また、海外の地域住民の支援活動について調べています。ドイツの介護保険制度は、在宅支援を基本につくられました。ひとり暮らし要介護高齢者に対する地域住民の支援活動について、現地にて高齢者コミュニティーに参加し、資料収集を行っています。

3. 研究業績

【論文】

- 1) 堀口久枝, 杉澤秀博：ひとり暮らし要介護高齢者に対する住民による支援の過程－住民の視点から－. 老年学雑誌（10号）

1. 研究課題

認知症高齢者の終末期医療・ケアを代理意思決定する家族への看護支援

2. 研究活動の概要

進行した認知症高齢者の終末期医療・ケアの決定は、家族が高齢者に代わって行わざるを得ないことが多い。このような家族が担う場合が多い代理意思決定は、家族に苦悩や困難感、重責をもたらすことが報告されている。人口高齢化が著しく、多くの認知症高齢者を抱える日本では、認知症高齢者の終末期医療・ケアを代理意思決定することになった家族を支える支援は重要な課題となっている。

本研究は、介護老人福祉施設（以下、特養）における代理意思決定の経験をもつ認知症高齢者の家族を分析対象としている。特養は、2018年の終末期医療の診療報酬と介護報酬の同時改定において看取り機能が強化されたことから、認知症高齢者の終末期の受け皿としての比重が今後一層増すことが予想されている。しかし、医師の配置が義務付けられていない特養においては、医療専門職である看護師が家族による代理意思決定の際に重要な役割を果たす必要がある。

2019年度は、以下の2課題に関する学術誌への論文投稿及び査読修正を行った。

1) 代理意思決定し看取る過程で家族が経験した精神的負担と代理意思決定に対する想い

本研究の目的は、施設内看取りを認知症高齢者に代わって決定した家族が看取りに至るまでの過程で経験する精神的負担、および代理意思決定に対する想いに影響する要因を質的な方法論を用いて明らかにすることであった。質的データは、入所施設において高齢者を看取った家族を対象とした面接調査の逐語録である。分析の結果、①家族が経験する精神的負担には、決定時期では「選択の迷い」と「決断せざるを得ないことへの重責」、看取り決断後は「高齢者が次第に痩せ細る姿への悲しみ」と「臨終の 때가近いと覚悟する悲哀」があること、②家族の代理意思決定に対する想いは、実際に施設内で行われた看取り介護に対する評価に影響されていること、が明らかとなった。研究結果は、日本老年看護学会誌「老年看護学」に掲載が確定している。

2) 代理意思決定した遺族の満足感と後悔に関連する要因

本研究の目的は、認知症高齢者の終末期医療と看取り場所を代理意思決定した遺族の「満足感」と「後悔」の関連要因を、特に看護支援との関連において解明することであった。分析データは、調査に同意が得られた遺族に対する質問紙調査から得られた。①代理意思決定への「満足感」と「後悔」には強い相関は認められず、関連要因が異なる可能性があること、②看護支援の実施状況に対する認識が遺族の代理意思決定への「満足感」と「後悔」に対して直接的または間接的に影響を及ぼすことが示された。研究結果は、「老年学雑誌」に掲載が確定している。

3. 研究業績

【論文】

- 1) 牧野公美子, 杉澤秀博, 白柳聡美 (2020) : 施設内看取りを代理意思決定し看取る過程で家族が経験した精神的負担と代理意思決定に対する想い, 老年看護学 (査読有), [掲載確定] .
- 2) 牧野公美子, 杉澤秀博 (2020) : 認知症高齢者の終末期医療と看取り場所を最終決断した遺族の代理意思決定に対する「満足感」と「後悔」に関連する要因, 老年学雑誌 (査読有), [掲載確定] .

【学会発表】

- 1) Naito T, Kurata S, Makino K, Nakamura M, Okada E, Ojima T : Comparison of nursing practice for rectal constipation among long-term care insurance facilities, 11th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress, 23-27 October 2019 (Taipei, Taiwan) .

【学会発表】

- 1) 桜美林大学大学院「老年学」公開セミナー：講座1「居住系施設における代理意思決定支援を考える」, 令和元年12月8日(日), 桜美林大学新宿キャンパス.

1. 研究課題

地域高齢者のスピリチュアリティに関する研究

2. 研究活動の概要

2010年に作成した「地域高齢者のスピリチュアリティ評価尺度」を基盤として、スピリチュアリティの視点を持つ地域高齢者の健康生活の支援に関する研究に取り組んでいる。その一環として、スピリチュアリティと身体的、精神・心理的、社会的健康の関連から、健康づくりプログラムの開発を主に行っている。（文科省研究費基盤C2017年研究代表者）

予備調査を経て、神奈川県A市で2018年6月～8月に健康づくり教室を実施した。プログラムには「笑いヨガ」と「グループ回想法」を用い、対照群を設定した。（神奈川工科大学倫理審査委員会承認番号20180322-26）評価方法は地域高齢者スピリチュアリティ評価尺度、健康度自己評価、精神的健康度GDS-15、生活満足度尺度LSIK、唾液アミラーゼ値、血圧測定等で検討した。

プログラムの結果の解釈については限界があるが、スピリチュアリティの視点を持つ健康づくりとして有効である可能性が示唆された。

3. 研究業績

【論文】

- 1) 三澤久恵, 新野直明, 他: 地域高齢者のスピリチュアリティの視点を持つ健康づくりプログラムの開発と評価, 神奈川工科大学研究報告, 査読有, 43, 31-41, 2019.
- 2) 佐口清美, 三澤久恵, 他: 地域高齢者のスピリチュアリティに影響を与える要因－出来事、元気づけ、勇気づけからみたテキストマイニング分析－, 神奈川工科大学研究報告, 査読有, 43, 55-59, 2019.

【学会発表】

- 1) 三澤久恵, 佐口清美, 他: 地域高齢者の健康づくり支援のためのプログラム開発－スピリチュアリティの視点を根底に－, 第12回日本スピリチュアルケア学会, 東京, 2019年10月.
- 2) 三澤久恵, 佐口清美, 新野直明, 他: 地域高齢者に対するスピリチュアリティ尺度を活用した健康づくりプログラムの効果, 第29回日本健康医学会総会, 兵庫, 2019年11月.

【その他の研究活動】

- 1) 神奈川県回想法リーダー養成講座受講中（2019年5月～現在に至る）
- 2) 東京スピリチュアルケア研究会の開催を準備中

1. 研究課題

- (1) 高齢者のセクシュアリティ
- (2) 外国人介護労働者の受入

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者のセクシュアリティ

高齢者の適度な性的な満足は、心身の健康や生きがいの源泉にもつながると指摘されている。他方、高齢者の性に対しては、一般の人たちの偏見が強く、そのことが高齢者の性的な満足障がいにつながりかねない。本研究の目的は、一般成人の高齢者の性に関する知識に影響する要因の分析である。

(2) 外国人介護労働者の受入

将来必要となる介護人材の不足を、外国からの人材に頼らざるを得ない現状の中で、如何に、受け入れ側の施設、そのスタッフ及びその利用者たる高齢者に満足のいく受け入れができるかが重要である。そのためにはまず、外国人介護労働者が日本の若者とどこが違うかを理解しなければならない。それは又、外国人介護労働者の日本での労働環境の改善にも通ずる。本研究の目的は、将来日本で介護労働者として働くことに興味のある学生、社会人を対象に「介護留学」についてのアンケート調査、分析を行い、その結果を基に、雇用者の理解を深めることにある。

3. 研究業績

【その他の研究活動】

- 1) 2019年10月、桜美林大学「老年学」公開セミナーで講演。
テーマ「外国人介護人材の育成」
- 2) カンボジアに於いて日本語学校を運営し、介護福祉士養成のための留学及び特定技能介護資格取得プログラムを行っている。

1. 研究課題

主たる在宅中高年介護者の介護負担感と体力との関係について

2. 研究活動の概要

主たる在宅中高年介護者の介護負担感と、介護者の体力を体格差に影響されにくい体重支持指数を用い測定し、負担感との関連を調査している。

3. 研究業績

【その他の活動】

- 1) 千葉県理学療法士会公益事業局委託事業 旭市障害者スポーツ体験会
- 2) 千葉県理学療法士会新人教育プログラム「高齢者の理学療法」講師
- 3) 富里市介護保険審査会委員
- 4) 救護施設、デイサービス、グループホーム、特別養護老人ホーム、老人保健施設など銚子市、匝瑳市、成田市老人福祉施設での調査活動

1. 研究課題

音楽療法と嚥下機能との関連

2. の研究活動の概要（3）に於ける「地域在住高齢者を対象とした音楽療法を取り入れた活動」参加者と非参加者を対象とした反復唾液嚥下テストの経年変化について

2. 研究活動の概要

- (1) 2006年6月より、静岡県浜松市南区の「特別養護老人ホーム南風」に入所中の、80～90歳代を中心とする超高齢者へのグループ音楽療法を実践してきた。毎週1回60分のセッションで、12人の対象の大半は認知症患者である。音楽療法士1人で対応している。アセスメントとして、開始前に担当責任者や参加者を誘導してくる直接の介護者から、1週間の状態、おもに昨晚の様子から現在まで、特に留意すべき点についての申し送りを受ける。音楽療法の概要は、先ず、今日の日付や天候、季節などの問い掛けに始まり、個々の前でアイコンタクトを取りながらの「挨拶の歌」。次からは、模造紙に大きく書かれた歌詞を見ながら「口の体操の歌」、テンポのゆったりとしたよく知られている「季節の歌」などを歌う。中盤には、リクエスト曲を織り交ぜたややテンポの速い明るく盛り上がる曲をベルや軽目の楽器を演奏しながら歌う。次に楽器を集めた後、ゆっくりとしたテンポや雰囲気を持つ終盤のクールダウンの歌へと向かう。歳を重ねる毎に低下してくる視力、聴力、握力などさまざまな体力の衰えに添うような、楽曲や楽器の準備を心掛け、当然ながら低い音域での移調奏や遅めのテンポでのセッションを進めている。フィードバックについては終了後、MTが作成した表（PAFED=デイケアプログラムにおける認知症患者の表情による心理評価スケール）を基に、担当責任者に報告、検討を加えながら次のセッションに活かせるよう考究している。
- (2) 2006年6月より、静岡県浜松市南区の「デイサービスセンター南風」に於いて、75～90歳代を中心とするデイサービス利用者へのグループ音楽療法を実践してきた。毎週1回60分のセッションで、対象は約20人である。そのうち80%は認知症患者であるが、他の疾病を持っている者や一人暮らしの者も多い。音楽療法の概要については、個々の前でアイコンタクトを取りながらの「挨拶の歌」以外は、上記2の（1）とほぼ同様である。但し、曲のテンポや療法士の話し方などは、上記2の（1）よりやや速めで進めている。中には、自身が希望する歌を、他の参加者への気使いを見せながらリクエストする者もいる。療法士が探しだせない歌もあり、その場合には、歌声に合わせながらその場でコードを付けるなど、できる限り希望に沿った歌を中心

に進めている。自由参加であり、友人同士誘い合っ来てたり、介護者に付き添われ、初めて歌いに来る者など様々である。前に設置されたボード上の歌詞カードに記したカラーシールを見ながらの、ベルやトーンチャイムの演奏については、初めての方も多く躊躇う様子をみせながらも真剣に取り組んでいる。デイサービス利用者であり、歌うことが好きな者が、単に歌うだけではない音楽療法に触れること。やや難しいと感じられるような、賦活を促す様々な要素を取り入れた内容に向き合うことは、必要ではないか。介護職に連れられ恐る恐る参加したとみられる利用者が、その後も継続して参加し、徐々に笑顔の回数が増してくる様子を見る。音楽療法終了時の参加者からの感謝の言葉。また、現場介護職からのフィードバックにも、音楽療法に参加することを楽しみにしている利用者の感想が聞かれる。音楽療法が、少しでも参加者の日常生活能力の維持と、生活の潤いの一助となっていることを願う。

- (3) 2010年5月より、地域の女性部を中心に集まった高齢女性20~25人への音楽活動を、静岡県浜松市中区の北部協働センターに於いて実践している。参加者は、近隣に住む者が約半数であり、他は車やバスを利用して通ってくる。内容については、音楽療法の要素を多く取り入れ、参加者からのリクエスト曲を中心に展開している。また、ロコモティブシンドローム予防のための体操も取り入れてきた。2015年、2016年の内閣府や厚生労働省による高齢者の死因をみると、死亡率（65歳以上人口10万人あたりの死亡数）は、「悪性新生物（がん）」930.4、「心疾患（高血圧症を除く）」532.5に次いで、平成22年より第3位が「肺炎」348.9である。誤嚥から肺炎に至るケースも多い。特別な嚥下訓練を加えていない音楽療法の要素を取り入れた歌唱活動により、嚥下機能への影響を調べることは意義あることと考え、調査、研究することとした。A、B 2グループの反復唾液嚥下テスト（RSST）1年間の経過から、音楽療法が一般高齢女性の嚥下機能の維持・向上に役立ち、肺炎予防に寄与できる可能性が推測された。2018年 第13回日本応用老年学会で発表。

3. 研究業績

【学会発表】

- 1) 日本音楽療法学会第19回大会「研究と臨床の深化～多様なニーズに応えるために～」

会期 2019年9月20日（金）～22日（日）

会場 大阪国際会議場（グランキューブ大阪）に於いて、

音楽療法による一般高齢女性への嚥下機能の経年変化について

－反復唾液嚥下テストの音楽療法実践群と非実践群の結果－ を発表。

2018年日本応用老年学会で発表の、音楽療法と嚥下との関連による、音楽療法実践群についての研究から、その効果をより明確にするために音楽療法非実践群との比較を試みた。比較対象とした音楽療法非実践群には、開始前と後で有意な差は認められなかった。反復嚥下テストの2年半に亘る実践群の経年変化から、音楽療法が嚥下機能の維持・向上に役立ち、肺炎予防に寄与できる可能性が推測された。

1. 研究課題

ケイパビリティ・アプローチの視点から見た現代社会における社会福祉に関する考察

2. 研究活動の概要

アマルティ・センの「ケイパビリティ・アプローチ」について、神島は次のように記述している。「ケイパビリティ」(capabilities)とは、ある人が何か行ったりする (doings)、何かになったりする (beings) ための実質的自由を意味する。人びとのケイパビリティは人びとが有する「財」と関連すること、また、人びとの生活はさまざまな「機能」(functionings)、すなわち、何かをおこなったり、何かになったりした状態から構成されている。このように「ケイパビリティ」については、人びとの多様性を考慮に入れ、個人的選択に価値をおくという立場から、人びとの福利の指標として用いようとしている。

マーサ・ヌスバウムの「ケイパビリティ・アプローチ」については、2000年の著作『女性と人間開発』では、以下10項目がリストに掲げられている。①生命、②身体的健康、③身体的保全、④感覚・想像力・思考力、⑤感情、⑥実践理性、⑦連帯、⑧自然との共生、⑨遊び、⑩環境コントロール。これらの項目は、あくまでも個々の要素ということであり、相互に複雑に関連しているとされている。私たちが家族というものを見るとき、いったい誰のケイパビリティを見ているのであろうか。ヌスバウムは一人ひとりをみななければいけないということを述べている。

現代社会における社会福祉を考える際には、ケイパビリティは重要な視点を提供していると思われるので、今後も引き続きこの理論を深く追求していきたい。

参考文献

- ・マーサ・ヌスバウム. 池本幸生ほか訳: 女性と人間開発—潜在能力アプローチ. 岩波書店. 2005.
- ・神島裕子: マーサ・ヌスバウム—人間性涵養の哲学. 中央公論新社. 2013.

平成31（令和元）年度研究活動報告

発行：桜美林大学 老年学総合研究所
〒194-0294
東京都町田市常盤町3758
TEL. 042-797-2661(代)

発行日：令和2年3月31日

編集：（有）片野印刷